
君の支え

珠李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の支え

【Nコード】

N1712E

【作者名】

珠李

【あらすじ】

タク：君は私を感じてる？私はすつごく…えへ。タク：君は今、あの日のように私が笑いかけたらいつものように照れ隠しをしてそしてぶっきらぼうで…けど、何処か優しいそんな笑顔を見せてくれるのかな？タク：君が私の支えになってくれたのと同じ。今度は私があなたの支えになりたい。君の、“心”の支え

プロローグ

タクへ

へへへ。

君は、怒るのかな？

突然の手紙交換の申し出。

だって、一度はほしくない？

好きな人からのラブレターってさ。

いつもワガママ言っでごめんなさい。

でも、なんだかんだ言っで許してくれるのがタクだよ。

不思議だよ。

こうやって手紙を書いている今ね？

君の事しか浮かんでこない。

いや、そりゃ君宛ての手紙だからそうなのかもしれないけど…。

私が突然この手紙を渡して、

「タク、返事ちょうだいね？」

手紙交換だよ？絶対だよお？」

って、言うつと

いつものように少し照れながらさ？

俯き加減で言うんだよね。

「めんどいじゃん」

って。

でも、君が照れて俯きながらぶっきらぼうに発する言葉。それはせ〜んぶ照れ隠しなのはもう知ってるもんね〜だ。

隠せていませんよ？おにーさん

あ、でも…どうだろう。

私の妄想の中の君はそういう反応を見せてくれてるけど…

も、しさ！実際…嫌だっと思ってたら

…言わなくても言うよねえ…

そのときは相手の目を見て言うよね、ハッキリ。

「いや、無理」

あれ、冷たいよねえ。

ま、少し慣れつつあるけれど。

私はそうやって、

ハッキリ気持ちを伝える事が出来ないから

そんな君が羨ましいなーって思う。

そして、嫌な事は嫌って言える君が大好き。

他にも、照れ隠しを必死でする姿や、

些細なことで大喜びする姿。

絶対泣きそうに無い感じなのに、実は涙脆いところとか…

全部、ぜんぶ大好きなんだけどね！

ねえ、タク？

こんな私の傍にいてくれてありがとう。

私、恋愛は諦めていたの。

いや…好きな人は出来てもこうやって相思相愛になるなんて事…

夢の中の話だと思っていたから…

だから君があの日…

私に言ってくれた言葉はとても大きかったです。

そして、今でも私の支えとなっています。

だからタク。

今度は私が支えになる番だと思うの。

立っている君を支える事は無理かもしれない。

けれど、君の“心”を支えていきたい。

駄目、かな？

タク、絶対に大丈夫。

私が傍にいるからね？

こんな…何も出来ない私だけけど…

傍に、いるから。

大好きだよ。

タク、お返事ちゃんとちょうだいよ？（笑）

じゃ、今日はここまで！

タクが返事くれたら、私また書くからねッ！

ずーっと続けてよ？

…あー。

しつこいって怒られちゃうね。

よし、終わるぞー！終わりッ！！

香織より

もう、この光景は見慣れたものだった。

幼い頃から通院しているため、看護師さんたちとは顔見知り。

今では少し年上のお友達感覚だった。

普段は母に付き添ってもらうのだが今日は家族揃って外せない用事があるらしく

私は初めて一人で週に一回の定期検査に行くことになった。

一週間前、小さな家族会議が開かれた。

「でも、やっぱりお母さん着いてくわ。」

「えー！いいよ！私もそんな歳じゃないし…そろそろ一人で通院考えてたから」

「でも、危ないわよ」

「もう、お婆ちゃんのが大事な。ね？お母さんはお父さんと一緒にお婆ちゃんとこ行って来て？」

そういうと、二人は顔を見合わせて少し困った顔をする。

「ねえ、茜？待ち合わせ時間をずらすとできない？」

「ん…いつもの友達ならいいんだけどねえ」

「いいってばー！茜だって彼氏との記念日なんでしょう？一年目なんだしー！ね？大丈夫だって」

「香織、ごめんね？」

姉の茜は、幼い頃に私が『お姉ちゃん』と呼ぶことを嫌がった。

気持ち悪いらしく、ずっと名前で呼んでいる。

それを両親や、祖父母、親戚人たち、そしておまけに学校なんかの先生によく叱られたものだ。

その度に、“茜”から“お姉ちゃん”に呼び方がかわるのだが、同じくその度に、姉から「ちょ、気持ち悪いって！」と言われるのだ。だから、いつしか誰がなんとのおとうが“お姉ちゃん”と呼ぶことはなくなっていた。

「気にしないでってば〜ね。そろそろいいでしょう?」

母に一人での外出を尋ねてみる。

近所のスーパーやコンビニに行く程度ならば何も言われないのだが、通院先の病院は車で三十分ほど離れた場所にある。

交通機関を使ったとしたら、バスを待つ時間も含めて一時間ほどかかるのだ。

だから、未だに通院を一人であることを許可されていない。

「ねえ、お母さん?私もう幾つだと思ってるの!??」

「…そりゃ…そうだけど」

「来年には二十歳だよ?!もう、大人なの!それに今、十八歳からもう大人にしちゃいましょう!な時代よ?そんな時代に病院もまとも一人で行けない十九歳がいますか!しかも、そんな娘に…なんか、過保護じゃなあい?」

そう言つて、少し興奮気味に反抗する私に母は困つたような顔をす

る。「香織、それはないわよ。お母さんだつてあなたのこと心配してるんだから。それは私も一緒。バスとか乗るとなるといろいろやこしいんでしょ?私は一緒に乗ったこと無いから知らないけど。とにかく、一人は危ないって。」

「…香織?病院の日、ずらしてもらいまっしょか。」

「……ヤダ!」

「まあまあ、落ち着きなさい」

言い合っている私たちの間に入ったのは新聞を読んでいたお父さんだった。

お父さんはニッコリと笑って

「香織？本当に行けるのか？自分で一人で出来るのか？」

「…う、うん！」

「近所と違って、やっぱり人の見る目も違う。それでも大丈夫なら、行ってきなさい。お父さんも最近ちょっと過保護すぎるかなって思っていたからね。」

「ほんと？！お父さん、いつてくるねっ」

「…あーあ。そんなところが十九歳に思えないのよ」

「なっ!?!」

茜に笑われ、少しふくれた顔をする。

父は笑っていたが、母は最後まで腑に落ちなかったようだが、最終的には気を付けていくという約束をして、許可を貰った。

ふと、目の前の電工パネルを見ると『53』の番号が照らされている。

私は自分が受け取った整理券の番号と照らし合わせた後、診察室へと向かった。

二十歳前の娘に対して、両親たちを過保護にした原因は私の足にある。

幼い頃、交通事故に遭った私。

幸い命に別状はなかったのだけれど頸髄損傷してしまい、半身麻痺

と言われたらしい。

最初、動かない足に疑問を抱き、お医者さんや両親に何度も聞く私に対して

リハビリをすればすぐに良くなると言った。

だから私は懸命にリハビリに励んだというのに…良くなる事は無く、今ではリハビリをすることさえ無理な状態になってしまった。

そして、移動をするときは車椅子が必要となった。

今では車椅子が私の足であり、現実を受け入れる事が出来ている。

けれど、やはり幼かった私は走りたいたのなんだと泣き喚き、父と母を困らせた事は何度もある。

そして、今では受け入れた現実で、慣れ親しんだ車椅子であっても交通機関を使う時に周囲に迷惑をかけたりにしてしまう。

だから、両親が車で送ってくれるか姉が押して遠いというのに歩いて連れて行ってくれるのだ。

それはとてもありがたい事で、小学生、中学生の間はそれが当たり前だと思っていた。

でも、いつからだろう…

気づけばそれが迷惑なんじゃないか？とか、自分一人でも大丈夫なのに…と、思うようになり、近頃は何度か一人で外出をするようになった。

一人で外に出ると言えば、家の小さな庭にあるベンチに座っているくらいだったのだけれど近所を散歩してみたり、公園で日向ぼっこをしたり…

外の世界の楽しさを知る事が出来た。

その所為だろうか？

もっと外の世界を見たい。

もつともつと、知りたい！と、思うようになっていた。
そんな時に舞い込んできたチャンスだ。
逃すわけには行かないと、最後まで一人を通した結果こうやって一
人で病院に来る事が出来た。

行きなれた道順。

母と一緒に時はいつもバスを使う。

バスに乗り、少しウトウトしかけたところで降りる。

バスの運転手さんと、乗客の方々に頭を下げてそのまま病院へ向か
う。

受付の時、看護師さんに会うとやはり驚かれた。

「でも…そうよね。香織ちゃんも、もう十九歳なんだものねえ…」

「遅いくらいだと思いませんか?」

「あはは…！けど、お母さんたちも心配してるのよ？あまり心配か
けないようにね?」

「はあ…い」

そんな会話を数人の人と交わし、そして今も同じような会話をして
いた。

…正直うんざり。

「香織ちゃん、ここまで一人出来て何もなかったかい?」

「あゝのゝねえ?私、もう十九です。センセたちみんな、私がまだ
四歳の頃のまんまで止まってるんじゃないんですか?!」

「ぶふ…そうなのかなあ…ほら、香織ちゃんのことば僕たちずっと
見てるからねえ…そりゃ、移動になった看護師さんたちもいるけど。

けど、ほとんど顔見知りじゃないか。みんな…親と同じ目で見てるか、妹のように思えるんだろうねえ。」

そう言つて、十五年間ずっと私の担当医をしてきている橘先生がニツコリと笑う。

当時、橘先生は新米さんで、受け持っている患者さんは少なかつた。緊張した様子で私に接してくれた橘先生に対して私は兄のように慕っていた。

「でも、センセもおじさんになつたよねえ。」

「おいおい…それを言うなよ。僕だつてまだつて…もう二十八なんだよなあ…うわ…しかも誕生日きたら四十だよ…」

「な、んかもう…お兄さんつていうよりオジサンだね…」

「うわああ！言うなつて…」

「ククク…！でも大丈夫、センセは見た目まだ三十四、五でイケルよ」

「あんまり変わらないなあ…」

そう言つて頭を搔く。

これも昔から変わつていない。

いつも少し困つたというか、「参つたなあ…」というとき先生は必ず頭を搔く。

ちよつと左に首を傾げながら。

「ほら、センセ！またツノちゃんに怒られちゃうよ？早く診てよ〜」

「あ〜はいはい」

そう言い、看護師さんと一緒に私を支えて寝かせてくれた。その後、私の足に触れる。

といつても、触れられている感触はないのだけれど。

先生の手は私の足をマッサージしてくれているようだ。

「どうかな？」

「もお〜…いつも同じだつてばー」

「あはは…僕は諦めたくないんだけどなあ…」

「センセ？センセも諦め悪いよねえ…」

「あら、香織ちゃん？患者さんが諦めてちゃ、治る物も治らないのよ？」

「…でもお」

「僕は信じたいんだけどね。それこそ…君の担当医としてはね。」

「…はいはい。あーりがとー」

ぶつきらばうな返事を返したものの、すごく嬉しかった。

何度か諦めたくない、先生は言っていたけど今日はどうしてだろう…キユッと胸が締めあって嬉しくて泣き出しそうになった。

この十五年間、ずっと先生でよかった。

先生が何度も院長さんをお願いしてくれたおかげで…本当に、よかった。

「じゃあ、また来週ね。」

「はあ〜い」

そう言つて私は先生に軽く頭を下げて診察室から出る。

扉を閉めたとき、丁度目の前を“ツノちゃん”が通過する。

「…あら、こんにちは。」

「こんにちは〜」

宮脇看護主任。

通称“ツノちゃん”。

橘先生と私が長い付き合いなだけに、先ほどのように診察の間にお喋りをする。

そうすると、後の患者さんが待たなくてはならなくなる。

まあ、私たちが悪いのだけれど。

それを見つけると顔を鬼のように変えて怒鳴られてしまうのだ。で、当時十二歳だった私が思わず

「わ…宮脇先生…角生えてたかもしれない…」

と、呟いたのをきっかけに私たちの間で宮脇看護主任さんはツノちゃんと呼ぶようになったのだ。

他の看護師さんやお医者さんたちも実はそう呼んでいるのだけど、本人は未だ気づいていないみたい。

「今日は早く終わったのね？」

「あ、はい。」

「そう…ならよかったの。あなたに時間を取りすぎるわけにはいかないから」

そう言われてムツとするがそこは我慢、我慢。

この人はこういう人なんだから仕方が無い。

「…すみません。じゃ、失礼します」

「…待ちなさい。今日は、一人なの？」

「え？ああ。はい。両親、あk…姉も外せない用事があつたみたいなんで。」

「…そう、大丈夫なの？」

「え？あ、はい。案外大丈夫でした」

「そう、じゃあ…失礼するわね」

ツノちゃんはそういうと、いつものように口をキュッと結んだまま足早に去っていく。

何度か笑っているところをみたけれど、笑えば優しい感じなんだけどなあ…。

時間を見ると、午後一時を回っていた。

今バス停に向かったら丁度良いのに乗れるかもしれない。

そう思っただけ私は車椅子を漕ぎ出した。

「げ……」

病院の外に出た時、携帯電話がないのに気づく。

多分診察を待っているときに忘れたのかもしれない。

慌てて戻ると、椅子の上にピンク色の携帯電話が置かれていた。

「よ、よかった……」

開けてみると、母と父、そして茜からメールが入っている。

どれもみんな私の一人通院を心配した内容だった。

「……もう。」

私はもう少し奥にある自販機コーナーへと移動し、そこで三人に返信をしてジュースを飲み、一息つくことにした。

どうせ携帯を取りに戻った時点でバスには間に合わなかったに違いない。

一息を着いたところで、母から電話が掛かってきた。

「もしも……」

「返事遅いから心配したでしょ?!」

「お母さんっつ！声大きいからっ！それに……そう、治療中に出れるわけないでしょ?」

私はここで敢えて携帯を忘れた事は言わない。

何か失敗があると、二度と一人で来させてもらえない気がしたからだ。

「あ……そう、ね。ああ……もう！お母さん今日ずっと心配で……やっぱりやめとけばよかったって思ってたけど……大丈夫だったのね?」

「うん。来週からも一人で行くよ?だって、ヨユーヨユー!」

「と、にかく！お母さんの用事終わったから……そこにいてね?」

「え……帰るよ?」

「いてね?! そうね…二十分で着くから!!」
「は、はい」

母は用件だけ伝えると一方的に切ってしまった。
最後まで自分で出来なければ意味が無い。

私は口を尖がらせ、カップに入ったジュースを飲んだ。

カップを捨てて、私は場所を移動する事にした。

二十分もここでゆっくりなんてしてられない。

ツノちゃんに見つからない程度にブラブラとしていればいいだろう。

私はエレベーターに乗って五階へと移動した。

地下の売店よりも五階の売店の方が品揃えがいいのだ。

これも、長年通院しているから知っている事だ。

五階の売店は意外と知られていないようで、客の出入りも少ない。

だから私にとって秘密の場所なきがして好きだった。

「こんにちは」

中に入ると笑顔で迎えてくれる清美さんがいる。

ここを見つけたときは清美さんのお母さんがレジをしていたのだけ
れど

病気で仕事を続ける事が出来なくなったらしく今では娘の清美さん
がしているのだ。

「香織ちゃん、久しぶりだね?」

「最近お母さんと来る事が多くて…検査終わったらすぐ帰っちゃう
から」

「そ。今日は茜ちゃんと?」

「んーん。えへ、一人なの」

「うっわ。お許しでたんだ?」

「うん。やつとだよ？もうそんな歳でもないのにさあ。」

「ふふ…久しぶりに会えて嬉しい。こつち、来る？」

「今、いいの？」

「うん。おいで？」

私は清美さんが座る椅子の横に行き、ジュースを買って先週の家族会議の話をした。

私が怒ったり、自分で言っておきながら笑ったりするのを見て、清美さんもクスクスと笑っていた。

「あ、そうだ。香織ちゃん、今度502号室に入ってきた患者さんねー」

「え？うん」

「香織ちゃんと同じ歳くらいの男の子んだけど毎日退屈そうにしてるんだ〜今度遊びに行つてあげて？個室だし。」

「え…やだよ〜」

「どうして？」

「そんな、知らない人…」

「う〜でもあんまりにも寂しそうだし…ま、香織ちゃんがアレならいいから」

「ドレ？」

「…いいから。」

そう言つて笑い合つているところに母から到着したという連絡が入る。

私は手を振つて売店を出る。

これから一人で来るのだから毎週会えるな…なんて思いながら。

エレベーターに向かう途中、先ほど清美さんが言っていた病室の前を通る。

偶然なのか、なんなのか知らないけれど扉が開いていた。

「…覗くくらい、いいよね。って覗きつてだめじゃん」
そう言いながらも、私はこっそりと中の様子を見る。
何も無い病室だった。

私が入院した時は、母や茜がいろいろと持ってきてくれて時計や、ぬいぐるみなんかで寂しくなかった。

けれど、その部屋には最初から準備されていたようなものしかない。そして、その中で私と同じ歳くらいの男の子が足を吊り上げられてベッドから起き上がるうとしていた。

けれど、上手くいかないのか苦戦しているようだ。

「……………」

私は自分のリハビリを思い出す。

まだ動くと諦めていなかったあの時、私は必死に起き上がる練習をしたっけ。

そのとき…無理な時橋先生はどうしてくれた？

「…ちよ」

「あ……………」

私は気づいた時には彼を支えていた。

彼は突然入ってきた私に驚き、口をポカンと開けてこっちを見ている。

私かというと車椅子から見を乗り出し、今にも転びそうだった。

「そ、の…通りすがりの…者でして…？」

「や、聞かれても…困るんだけど」

「あ、ごめんなさい…その…辛そうだったから…つい」

「ん…ありがとう」

「い、いえいえいえいえいえい！」

「や、そんなに焦らなくていいし」

そう言いながら彼は小さく笑った。

これがタクとの出会いだった。

「とにかく、君が座りなおしてくれないと…」

「はっ?! あ、ご、めなさ… ツま、待ってね!」

私は慌てて身体を起こそうとする。

けれど、なかなか上手く起き上がってくれない。

いつもはできるというのにどうしてこんなにも焦っているのだろうか…。

つて、そりゃそうか…こんな全く知らない人の病室覗いて、入り込んで…

「…大丈夫?」

そう言つて彼は私の身体を支えながら起こしてくれた。

私はふうつと、小さく息を吐いて彼の顔を見る。

「ありがとう」

「どっちが助けられたんだか…」

「う、うるさいな」

「君も、足を怪我したの?」

「え?」

「…車椅子」

「あ、ああ。えと、これね…事故、で! 事故で動かなくなっちゃったの。だから車椅子。」

「え? あ…ごめん」

「あ、謝らないで。謝られるほうがやなの。だからそれでいいんだ。」

当たり前でしょ？車椅子なんだから。下手に聞かれないほうがイヤ。

「そ、つか。」

「そつちは何？骨折かな」

「正解。サッカーしててさ、スライディングされて折れた」

「え。」

「笑うなよ」

「サッカーって、そんな怖いもんなんだ」

「別に怖いつてわけじゃないだろ」

「怖いよ…折れるとかさー」

「そうか？」

「サッカーってサークルか何か？」

「え？授業」

「授業！？」

「え、しない？そつちの男子は」

「知らないもの」

「…？そつか」

私は義務教育は受けたのだけれど、高校に行く事を諦めた。

養護学校という手もあったというのに私は逃げたのだ。

やっぱり足の事もあって友人は出来難い。

好きな人が出来ても恋は実らない。

何度苦しい思いをしただろう？

友人だと思って信じていた子。

私がないときに言った一言。

「ちよつと…迷惑だよな」

心に突き刺さって、苦しくて…私はどうしようもなくなつて…
これ以上もう、苦しみたくなかつた。

だから進学をすることから逃げた。

「あ、お母さん」

新着メールが届き、内容を確認すると母からのまたしても心配メールだ。

なかなか外に出てこないからだろう。

「迎え？入院：はしてないよな、その格好じゃ」

「だね。じゃ、行くね」

「あーうん。ありがとう」

私は軽く手を振って病室から出ようとする。

後ろから、少し遠慮がちな声で

「また、暇：なとき、来てよ」

「え？」

「俺：暇だし：嫌なら、いいし」

「え、あ：うん。また、来る」

私は小さな声でそう答えるともう一度手を振る。

彼は手を振り返してはくれないが、まあそれもいい。

エレベーターの中、偶然出来た友人に嬉しさが込み上げる。

きつと、彼が退院するまでの付き合いに違いない。

それでもいいや…。

そんな事、何度も経験しているのだから。

名前も知らない男の子。

次に会う事が出来る日を、楽しみにしている自分が、なんだか可笑しかった。

- 春花火 -

「おはようございます!」

「あら、今日も一人?」

「えへ〜お許しでございました」

あの日、一人で初めて通院をした。

途中で携帯を忘れるという失敗もあったけれどその事は私だけしか知らない。

父からのお許しをもらって、毎週の定期検査は一人で行ってもいいといわれた。

そのおかげで、清美さんのところにも立ち寄る事もできる。

「違うんじゃない?」

清美さんが途中でニヤニヤと笑みを浮かべながら顔を覗き込んでくる。

私は少し身体を逸らし後、首を傾げその意味を尋ねてみる。

「だ〜から。私だけじゃないでしょ?502号室の子。違う?」

「え、何がですか?!」

「昨日、もしかして〜ってコッソリ見てたらちゃ〜っかり、行っただけじゃないの」

「そ、それは!清美さんが言うから…その、ちょっと覗いただけ…で!で、もなんかちよつと大変そう…で、えと…」

「はいはい、もういいつてば。今日も行っただけねん」

「え…でも」

「なんならもう行っちゃって〜?ついでに私ココ一回閉めて銀行行くわ」

清美さんが出かけるのならここにいても仕方がない。

私は渋々外に出て、言い訳を口にしては途中で止められてしまう。もう何を言っても無駄なようだ。

私はそのまま502号室へと向かう。

やはり今日も扉が少し開いていて、真っ白な部屋の中に彼はいた。名前を確認し、ノックをして中に入る。

「結城拓哉くうくんこんにちは。」

「へ、う、わあ?！」

何に慌てたのか、彼…結城拓哉君は読んでいた雑誌を落としてしま
う。

ベッドから取るのは大変に違いないと思い、雑誌へと近寄るのだけ
れど拓哉君は慌てて私を止める。

「ああああ!そのまま、いいから!」

「え?でも…」

「こ、こここつち!こつちまわつてきて!!!」

私は首を傾げながらも拓哉君の隣へと移動した。

「ねえ、何読んでたの?」

「や、知らなくていいし。」

「教えて〜?見てこようつと」

「わああああ座つてろつて!」

「座つてるけど?」

私はニコニコと笑い、車椅子のブレーキを外す。

それを必死で押さえつける拓哉君は可愛くて仕方がない。

私はクスクスと笑い、もう一度ブレーキをかける。

「どーせエツチな雑誌なんじゃないの?」

「ちょ…んなもん見ねーし…」

「うつそお?」

そんな感じで笑って話し出す。

私は普段人見知りな性格なのだけれど拓哉君とはごく自然に話すこ
とが出来た。

笑っていると、通りかかった看護師さんに注意されるほどだ。

拓哉君は、私がどうして名乗ってもいないのに名前を知っていたの
かと聞くので敢えて教えてあげない。

しばらくして気づいた時の拓哉君の顔は傑作だった。

「じゃ、帰るね」

「あ…うん。」

楽しいと感じる時間はすぐに過ぎてしまう。

それは仕方のないことなのだけれど、どうしてもここにいたいと思っ
てしまう自分がまるで子供のようだ。

「また来週ね」

「ん、来週。…そうだ。」

「ん？」

「…そっちの名前、聞いてない」

「あ？ああ、ごめん。香織だよ、東香織。かおるにおる…機織と
かの。」

「…そか。ありがと」

「うん。それじゃねー」

言葉数が少ない彼なりの努力だったのだろうか。

話しているとき何度か名前を聞こうとしてくれた。

だけど、それが言い出せずに結局「君」とか「そっち」で呼ばれて
いた。

意地悪がしたくなった私はワザと気づいていないフリだ。

で、ようやく最後の最後に聞いてもらえたってわけ。

おめでと、合格！

このとき私はまだ、自分の中に宿った新たな気持ちなんてものには
気づかず、鼻歌交じりにエレベーターに乗り込む。

一階に着き、ドアが開いたとき中の者が出るのも待たず、中に乗り
込んでくる人とぶつかってしまった。

「あ…すみません…！」

足を踏んだような振動があったためあんたが悪いんだよ！？と、思いながら頭を下げる。

「あー、いいよ、いいよー！」

「え？」

その声に聞き覚えがあり、私は八つと顔を上げた。

目の前には病室で寝ているはずの拓哉君がいた。

「ん？あ、ごめんねー俺も悪いよなあ…大丈夫？出れる？手、貸す？ん、何？」

「え、と、え…？あ、の…え？」

「……？大丈夫？とりあえず出る？出るよねー。」

拓哉君は私の車椅子を押し、エレベーターの外へと出してくれた。

私は頭の中がパニックになりそうながらももう一度その男性の顔を見る。

…やっぱり拓哉君だ。

「え、と…足、いいの？」

「ん？あゝ大丈夫。全然気にしないで…それじゃ、俺急ぐから」

そう言つて拓哉君はエレベーターに乗り込んでしまった。

私は服まで着替えた拓哉君に驚きバカみたいに口をポカンと開けて立ち尽くすしかなかった。

翌日、寝ぼけた私の元に素敵な贈り物が届いた。

それは電動車椅子だ。

以前から気になっていたのだけれど値段、そして普段家族と一緒にということから必要がないね、と言っていた物だ。

「え、こ…これ？」

「香織、これはみんなからのプレゼントだよ」

「で、もお父さん？」

「お母さんはまだ心配なんだけど…けど、香織も一人で病院に行くようになったし…手で漕いでちゃ疲れるでしょう？」

「二の腕の筋肉モリモリ〜になってもヤでしょ？ククク…」

「でも、え?!」

驚いてワタワタする私を見て皆が笑う。

みんなの笑いに釣られて私も意味なく笑う。

「ありがとう…すっごく…嬉しい！」

「うん、香織。これからも気をつけて行くんだよ？」

「うん！」

「ねえ、早く乗ってみてよ」

茜の手を借りて電動車椅子に乗ってみる。

「おおお！」と、歓声をあげてしまうほど、普段乗っていた車椅子よりも便利だ。

移動は楽だし、座り心地もいい。

ただ、ずっと一緒だった車椅子から離れるのは寂しいけれど…愛車というか…私の足だったから。

「どう？乗り心地は」

「ん、最高っ！本当に、本当にありがとう！」

涙を流しそうになりそれを隠すのに必死だった。

途中、何度か茜に“鼻が赤いですよお？”と、笑われたのだけれど…。

長年愛用していた車椅子は、自宅で使うということになった。

家の中の椅子にしたり、庭に出る時にはこれでいいだろう。

私がそれを申し訳なさそうに言うのがおかしいのか、三人はクスクスと笑っていた。

「え、ちょ…笑うの?!」

「いやなあ…」

「ねー？」

「あんなならそんなこと言うかもねって話してたの」

「お見通し…？」

「そ。」

その日、私たちはそれほど広くもない…けれど私が一番大好きな家の庭でバーベキューをした。

私は茜の隣に行き、網の上でたくさん並べられている肉には手を出さず茜のお皿からお肉を取ってパクパクと食べてやった。

それに怒った茜がお皿を使わずにお肉を食べだす。

それに対して母が「行儀悪い！」と、一喝すると「だ、だってえ！」と、食べ物ごときで目に涙を溜める茜が可愛かった。

「花火なんていつ以来かな？…うわっと」

父から火のついた花火を受け取りながら言う。

「んー…去年してないし…去年の夏以来じゃないのお？」

「てゆか…春に花火ってなんか、変っていうか」

「あはは…てか、湿気てなくてよかったね」

「ん…きつとお父さんの日ごろの行いがいいからだな」

「…よく言う」

「…プ」

バーベキューの片づけが終わると、父が何処からか出してきた花火をすることになった。

春に花火…なんて、珍しい事をしているものだから近所のオジサンたちが

「ほ…珍しいねえ。売ってたのかい？」

「綺麗だねえ」
なんて、声を掛けていつてくれた。

花火も残り少なくなり、父は家に入ってテレビを見ていた。

母も台所で、父にお茶を用意しながら何か話し掛けていているようだ。

「香織、どう？」

「え？」

線香花火に火をつけたとき、茜が突然話かけてくるので驚き、ライターを落としてしまった。

「あ、ごめん。」

「んーん。で、何が？」

「ん？一人で病院行くの。不安な事とかない？」

「ん〜：まだないかな。ほら、お母さんたちと行くと清美さんに会いにいけなかったし。茜と一緒にの時はいつも行くのになえ。」

「ねえ？私と清美が高校同級生だったの：覚えてる？」

「へ？あ、うん。何、いきなり？」

「で、どうなの？彼は」

そう言っつてニヤニヤと笑う。

最初は意味がわからなくて、ただ首を傾げているだけだったのだがまるで問題のヒントを出すかのようにして一つ、一つ言われていくたびに答えに辿り着いてしまった。

「聞いているんだよお？先週から通い始めたらしいねえ」

「通うつて：まだ二回じゃない。そ、それに！！清美さんが言うから最初の日は部屋を覗いただけで：で、ちよつとなんかえと：悪戦苦闘：してたし：助けただけ、うん！そ、そ、それに！今日は…えと、そう。清美さんが銀行に行くからって！！！！」

「ふーん。聞いてないのに。ごちそーさま」

「な!？」
ハメラレタ…。ここまで焦っている私も私だ…。
何、してるんだろ。変なの。

それからというもの、花火が最後の一本になるまで茜はニヤニヤしたまま私にずっと話し掛けていた。

全て話題は一緒だ。…拓哉君のこと。

「もー。終わりだよ。中、入ろ？」

「まままま!そのまま、そのまま」中に入ったらこんな話できないでしょー」

「…し、なくていいし」

「嫌あく。で、さ?香織はその子気に入ったんだ」

「は?別に…まあいい友達にはなれそう。なんだか面白いし」

ただ、昨日のエレベーターでの一件は気になるのだけけど…

私はこれ以上茜のニヤニヤに付き合いたくなかったためにその事は何も言わないようにした。

「ねーね。香織は、その子んこと“好き”になりそ？」

「え?んー…まあ、好きかなあ。」

「お?!」

「あ…違うよ?お友達としてね?それにさー、まだ二回しか顔も合わせてないし、話してない。正直どんな人かもわかんないのに好きとか嫌いとか、判断できないよ」

そう私が言うと、茜は少しつまらなさそうな顔をした。

しばらく黙って土に残った自分の足跡を見ている。

私もそれ以上何も言わないでばーっと、庭に咲く花に目をやった。

「ねー、茜。あそこに植えたひまわり、覚えてる？」

「…へ?あ、あー。うん。覚えてるよ。去年の夏に枯らしちゃったんだよね」

「そうそう。二人で育てて、出来た種植えてーってしてたのにな」

「まっさかあそこで枯れちゃうとわねえ」

そう言つてケラケラつと笑つて茜を横目で見る。

私がまだ小学校三年生のとき、担任の先生の家の庭にひまわりが咲いたらしく乾燥させた種をクラス全体に配つた。

その場で粗末にする者もいれば、翌日笑顔で「ハムスターにあげたら喜んでた」と、言う子もいた。

（先生の顔が真っ青になつたのは今でも覚えている）

私かというと、その日配られた種を大事にティッシュに包んで持ち帰り、母に頼んで庭のスペースを譲ってもらつた。

そのとき茜もまだ小学校六年生という歳で、帰つて来たら私と母が二人で庭で何かしている！と、飛び込んできた。

その夏、ひまわりの花は見事に咲き私たち姉妹の背さえも越えてしまった。

私たちはひまわりを見上げて、

「すごいね！」

「ほんと！」

「ねえ、もつともつとも~~~~とおおきくなるのかな！」

と、今では恥ずかしいような事を言つて喜んでいた。

ひまわりの花を咲かせたのはクラスでも我が家だけでそれなりに自慢だつてできたし、先生も喜んでくれた。

（翌年、誰が一番大きなひまわりを育てられるか！なんて生徒たちの間であつたなんて、その年で別の学校へ移動してしまつた担任の先生は知りもしないだろうなあ…）

その花が去年の夏に枯れてしまつた。

茜は高校を卒業して、専門学校とアルバイトをするようになりひま

わりの世話係から抜けてしまったのだ。

最初、私が頑張ればいいと思っていたのだけれど毎年このひまわりを育てる事が楽しかったのは

茜と当番をサボったとか、水の量が多いとか、今年は小さくない？なんて言いながらワイワイガヤガヤしていたからだ。

それがなくなると…やっぱり寂しい。

茜は最初、家に帰ってくるとひまわりの様子を見に行ってくれていた。

けれど…何かが物足りなかった。

そして、何度か注意されていたのにも関わらず夏になる前に…ひまわりは花を咲かす事なく枯れたのだ。

「香織…！！ひまわり…枯れた…よ？」

今でも耳に残る茜の悲しそうな声。

今までの思い出が全て消えてしまったかのような声だった。

確かに、枯れたひまわりの芽を見て私もそんな事は感じていた。ここでの思いでも全て…枯らしてしまったと。

後々自分で気づいたのだけれど、

私は車椅子でないと移動が出来ず、結局高校も、大学も諦めた。ううん、行かなかった。

自分が逃げたのに…自分が頑張ろうとしなかったのに…

羨ましかった…

アルバイトに専門学校…忙しいーだの、疲れたあ〜と言って帰って

くる茜が…だからだろうか…
ひまわりのことも重なり、寂しさが大きくなり私は自ら思い出を
消すような事をした…
茜はひまわりを枯らしたことを今ではネタのようにして話している。
けれど、私の中では自分の許せない部分の一つとされている。

「…茜…ごめん、ね？」

今更ながらに謝るとゴツンと、大きなゲンコツをもらった。

「…遅い。」

それに、私はもう気にしてないよ。

あの時…正直「こいつ何してんの?!」って思ったよ。

けどさ、私たちが覚えているから思い出なんじゃないの?」

そう言い、ニッコリと笑う茜。

私は泣き出しそうになり俯いてしまった。

ただ、小さな声で

「ありがとう」

と、呟き……。

春だというのに今夜は暑い。

隣で花火の後片付けをしている茜を手伝いながら

少し欠けたお月様を見る。

そうだ、明日買いに行ってみよう。

ひまわりの…種。

・告白・

連日降り続いた雨の所為で、私自身までもが真つ暗な空のように憂鬱に包まれていた。

外に出る事が出来ず、部屋の中ただぼーっと窓の外を眺める事にも飽き、偶然引き出しの中から見つけた折り紙も残すところあとわずか。

私はチューリップ以外折る事ができないために机の上には色とりどりのチューリップが咲き乱れていた。

…いや、正確に言うと散らばっているのだけれど。

「…退屈」

もう何度呟いたかわからない溜息混じりの四文字。

言う度に、私の心を憂鬱にさせるとわかっていても口を開けば口癖のようにして出てきた。

「香織いゝ明日は晴れなんだって」

リビングのソファを占領していた茜がお菓子を口に含みながら言うのが耳に入る。

「うん〜」

「…もつと喜んだらあ？晴れの日待ってたんでしょー」

「うん〜」

「…もう。」

喜びたいのは山々なんだけど、これで三日目なのだ。

明日は晴れるでしょう、明日は久しぶりに太陽が…なーんて。

「茜」

「あう？」

「それさ、見るとこ間違つてない？」

「ええ…あつてるつて。昨日も〜昨日も〜ちゃんと見たって」

「次外れたら…私抗議の電話しちゃうよ…？」

「…ぶ」

茜は今口に入れたばかりのポテトチップスを吹き出す。

笑わせたなどと言って文句を言いながら粉を拭いているようだ。

「…ばつちいなあ」

私はそう呟くと、そのまま自室へと移動した。

ひまわりの種を買いに行こうと決め、毎朝目が覚めるはカーテンを開けてシヨンボリ。

この一週間、雨は嫌味のようにして降り続けている。

それでも待って、待って…

どんよりとした天気だけれど、天気予報を信じて用意をしいざ外に出ようとすると降りだす…

なんて日が二日も続けばやる気も失せてこうなっても仕方ないだろう。

「明後日は検査あるから明日のうちに買いに行きたいのになあ…」

最近、独り言が増えて言った後に後悔する…なんてことは少なくなかった。

一人暮らしの寂しいおばあさんなんか一日中独り言を言っているイメージをもっているからか自分の老後が心配になる…なんて十九歳、何処にいるだろう。

(ここにいるんだけど。)

次の日晴れてほしいからといって、この年でてるてる坊主を作るのも恥ずかしい。

…いや、チューリップ折ってるのもどうかと思うんだけど…ね。

私はまたぼーっと空を見ながら“明日は晴れますよーに”と、小さく願った。

翌日、私の願いが叶ったのかそれとも神様のキマグレなのか…
いや、ただたんに天気予報が当たっただけなのか…
とにかく久しぶりにお日様が照り、私の憂鬱気分を吹き飛ばしてく
れた。

私はいそいそと用意をして、朝食を済ませると子供のように家を飛
び出した。

ほしかった服や、小物の買い物はすでに終わり後はひまわりの種を
買いに行くだけだった。

種を買った後に、何処かでランチをすればいい。
それからゆつくりと帰路につこう。

そう頭の中で予定を立てて私は花屋を目指した。

花屋までの道に新しいカフェがオープンしているようだ。

可愛いウエイトレスさんや、お洒落な店内。

私は思わず見惚れてしまっていた。

ランチはここでしてもいいな、そんなことを考えながら、前に進も
うとした時だった。

「うわう?!」

油断大敵。

前を確認しなかったのが原因だろう。

思わぬところで人とぶつかってしまった。

…というか轢いた?!

「ご、ごめんなさ…!大丈夫…じゃないですよ?!

相手は男性のようだった。

男性はしりもちをついたみたいだ。

「…ってー…」

「あ…あの…」

「だ、大丈夫、大丈夫だから…」

そう言っただけで立ち上がった男性の顔を見て私の口はポカンと開いた。

そしてまるでアゴが外れたかのようにそのままだ。

「君こそ、大丈夫かな？」

そう言っただけで私の顔を覗き込む男性。

私の頭の中はパニック状態で、返事をする事もできずただ口を酸
素不足の金魚のようにパクパクさせるだけだ。

「え、あ…大丈夫?!」

「ふあ…っはい!だ、だいじょうぶ。け、ど…え？」

そう、目の前に現れたのはここにいるはずのない彼…

まだ足にキプスを巻いてベッドの上で退屈そうにしているはずの…

502号室をひよっこり覗くと笑顔で迎え入れてくれる……

「拓哉…君？」

私がおずおずと聞くと、その人は一瞬困った顔をしたけれどすぐに
手を差し出した。

「大丈夫なんだ？」

「え、あ…うん」

「…ふーん。お昼は？食べた？」

「ま、ただけど…でもね…!でも!」

「僕もまだなんだ。どうかな?ここ美味しいんだけど。」

「え?...ちょ...拓哉君」

「決定ね？僕が押す方がいい？そのまま自分で入れそう？天気もいいしテラスにする？」

私の返事を聞かずに拓哉君は病室では見せたことのない明るさで接してくる。

何もいえないまま車椅子を押され、テラスの開いた席に誘導された。

「さ、何食べる？」

「え…えと」

「僕は…ん…あ、これにしよう。」

私は拓哉君とメニューを交互にチラチラと見る。

彼はもう決まったようだけれど、私はなかなか決まらない。

普段から優柔不断で外食の時は家族に迷惑をかけている。

目の前の拓哉君が私を見てニッコリ笑ったのを見て、待たせるのがなんだか悪く思ってくる。

「き、決まりました」

決まってもいない。

なのに口が勝手にそう言っていた。

彼はもう一度ニッコリと笑いかけると近くのウェイトレスさんをお呼んだ。

「僕はこれ。このサンドウィッチね。君は？何にする？」

「あ…えーっと…こ、これ…お願いします」

私は慌ててメニューを見て一番最初に目に止まったものを指差した。ちゃんと確認してみるとホットケーキのようだ。

…よかった、変な物を頼んでなくて。

ウェイトレスさんは注文を繰り返すとお辞儀をしてメニューを下げた。

私たちが話し出す間もなく、注文したコーヒーとミルクティーが運ばれる。

私はガムシロップとミルクを紅茶に入れたあと、ストローに口をつけるわけでもなくクルクルと中を混ぜてばかりだ。

それが面白いのだろうか？

彼はずーっとこっちを見てニコニコと微笑んでいる。

自分が半分強引にここへ座らせたというのに話し掛けてもしないでずーっとこっちを見るのってどうかと思う。

確かに、私も彼にぶつかっただのは悪い。

ちやんとでも謝ったし！

それに、この間までの怪我はいつたいなんだったのか。

確か後数ヶ月はココの中へって愚痴を言ってたのは誰だ！？

だんだんと腹が立ってきた私は彼をキッと睨みつけてやる。

「…ん？どうかしたあ？」

「ねえ、ちよつと」

「ん？」

「さっきからどうして黙ってるの？…それに、この間までの怪我…嘘だったの？でも、入院してたし…だいたい拓哉君…！」

「ストップ」

私は目の前に手を突き出されて口を閉じる。

目をぱちくりとさせ、彼を見ると笑いを堪えているようにも見える。

…い、一体何なんだろう！！

「あのさあ。あんまり騒ぐと、周りに見られちゃうよ？」

そう言っただけでまたニコリ。

な、なんなんだろう…微笑王子狙ってるの？！

「ま、って？だつてさ、足…とか！え、と…待ってね、頭整理…する」

「そーう？あ、きたよ、食べよ」

話の途中で食べ物が運ばれる。

私はそんなのどうでもよくて、話を聞きたいというのに彼は注文したサンドウィッチを頬張り始める。

仕方がないので私も頼んだホットケーキを食べ始める。

先に食べ終わったのは彼のようにだけれど食べるのが遅い私を待つて

くれていた。

「ごちそーさま。あ、食べるの遅い方か」

そう言つて彼はニヤニヤと笑う。

私が食べ終わったのを見て

「何か、飲んだりする？」

私は首を横に振る。

聞きたいことはたくさんある。

でも、何から聞いていけばいいのかわからない。

骨折つて嘘？だとか、どうして前はこんなに明るく振舞つてくれなかったのー？とか。

「さてとー。…病院、行くけど一緒に来るー？」

私はしばらく考えた後、首を縦に振る。

あそこは個室なわけだし、ここでいうよりはいいかもしれない。

私は怒り出すと大きな声になるからって、病室でもマズイかも…だけど、ここよりは恥ずかしくないし。

拓哉君はニツコリと笑つと伝票を持って立ち上がった。

「あ…」

私が財布を出そうとすると、首を横に振つた。

「いいよ、いいよ。僕が誘つたんだからおごらせて？」

そう言つて会計を済ませて私の元へ戻つてくる。

車椅子を動かそうとすると拓哉君は押ししてくれた。

私は普段人見知りをしない方なのだけど、異性に対しては苦手意識だつてある。

拓哉君とはすんなり溶け込めたのだけれどそれはぶっきらぼうな性格から、私から話し掛けないと、話し掛けないと…！という思いが強かった所為かもしれない。

逆に、今日のように話し掛けてくるタイプの人は少し苦手だ。

いつもの生活にそういう人がいないのも原因の一つなのかもしれないけど。

緊張して、頷く事しかできなくなってしまうのが嫌なのだ。けれど拓哉君だからなのか変な違和感なく、だんだんと普通に話せるようになる。

もう、足がどーのこーのなんて話、どうでもよく思えてくるほど、病院までの道のりは楽しかった。

コンコンッと、拓哉君は病室をノックする。

自分の病室だというのにノックする必要があるのだろうか。

それに、堂々と院内を歩いていたらけれど外出許可を取っていたという事だろうか？

「おー：タツ。アイス買ってきてくれ：た……か!？」

私の口は再びあんぐり。

ドアをあけた先にも拓哉君がいたからだ。

そう、先週の検査の時に話した拓哉君。

足にキプスを巻いて、少し退屈そうに同じ雑誌を読んで…

「え…え…え!？」

「ど、どして!?!どしてタツと一緒にわけ?!」

出会ったときの日のように、拓哉君：怪我人バージョンはベッドから落ちそうになった。

それを拓哉君：えつと明るいバージョンが支える。

「おいおいタクウゝ気をつけるって何回言ったらわかるんだ?」

「そ、それより…!お前どうして香織と…!」

「ん?香織って言うんだ。」

「納得してる場合じゃねーだろう!」

「せっかくつれてきてやったのにその態度はなんだよー」

二人の拓哉君のやり取りを見て私は何も言えず、ただ呆然とその場にいることしかできない。

確かクローンとかそんなのは作っちゃいけないんだよね!?

てか、クローンって本当にあつたの!? アリなのね!?

そんな馬鹿げたことを頭の中で弾けさせ、今にも頭から湯気が上がりそうなほどパニックを起こしていた。

そんな私に気づいた拓哉君明るいバージョンが再びニッコリと私に微笑みかけた。

…やっぱり微笑み王子狙ってる!

「んー 今まで黙っててごめんねえ?」

「え…あの」

「こいつ、俺の弟…タツヤ」

「ふた…」?

「そうです。僕等一卵性の双子なんだよーよく間違われて困ってるくらいなんだ。弟の結城辰哉。よろしくねえ」

「え、つと…じゃあ…」

「俺が本物の拓哉。あー! お前は どうしていつもこう…物事をややこしくするかなあ…」

本物らしい、怪我人の拓哉君が溜息をつく。

呆れて物も言えない…という様子だった。

一方、明るい拓哉君…じゃなくて弟の辰哉君。

彼は何が面白いのかずっとニコニコ状態だ。

なんとなく、いつもこんな風に初対面の人をからかっているのかも。

「やー。ほんと、僕等小さい頃から間違われるんだ。前なんか、ほら! 僕の彼女がタクと、タクのそんときの彼女が歩いてるの見て変な勘違いしちゃってさあいきなり修羅場ー! なんてことあつたよなあ」

「…そんな話しないでいいだろう!」

「いやー…あれは傑作だったな。タクの反応もなかなか面白かったしね」

「…香織。こいつといて何もされなかったか?」

「え?」

「おい、タク」

「大丈夫だった？」

「え…？うん。私が車椅子でぶつかっちゃってね？で、拓哉君と勘違いしちゃって。なんかわかんないけどお昼一緒に食べて今ここ。」

「ご飯食べてる間もずっと拓哉君だって思ってた…拓哉君にしては雰囲気違うなあとか思ってたけど。」

「そっか。大丈夫だったなら安心だ」

「おいタク。人がせつかく彼女連れてきてやったのに人聞きの悪い事言っくなって！それじゃ僕が危ないヤツみたいだろ…。それに、兄貴の彼女に手え出すほど…。」

辰哉君が口にする“彼女”という言葉に一瞬胸が飛び上がるくらいの勢いでドキンとした。

勘違い…されているだけなのだ。

なのにどうしてこんなにも…嬉しくて…でも…否定されるのが…怖くて…

「だから…何もしてないならいって。でもお前はそこんところわかんねーから聞いたの〜。」
あれ？

否定の言葉がないことに私は驚く。

そのことに気づかず二人は話しつつづけている。

「くそあ…ねね、香織ちゃん！僕何かしたかなあ?!」

「う…え？」

「ちょ…その反応…」

「おい…タツ」

「してねーって…!」

「したろー!?ぜってーなんかした!」

「わ、あ…だ、大丈夫だつて！普通にご飯食べて、お話してただけだよ？」

私が言うつと拓哉君は少し怒った顔をして手招きをする。

私は首を傾げ、彼の横へと移動した。

「こいつは初対面とか関係無いから。ほんと、気をつけたほうがいいから」

そういわれ、思わず吹き出してしまつ。

「え、なんで笑うの？」

「え？だつて…信用のない弟さんなんだなあ…つて」

私が笑っていると今度は辰哉君が拗ねたようだ。

拓哉君に頼まれたアイスを買に行こうと思つたけどやめるとかなんとか。

そんな些細なことで喧嘩をしている二人を見てみると自然と笑みが零れる。

それに、二人一緒に見ていると全然違うじゃない。

今なら私が目を瞑っている間に二人が入れ替わってもすぐにわかるな。

そう思えたらますますおかしくなってくる。

「あー！もういいもんねーだ。香織ちゃんも笑いつぱなしだし。

いいよ、いいよ。僕の方だけアイス買ってくるから」

「お前…！俺の金だろ？」

「知るかつ香織ちゃん、何がいい？」

「え？私？」

「なんでもいけるなら選んでくるよ」

「ありがと、でもそろそろ帰らないといけないから」

「えー、そつか。ならコイツのだけ買ってくるわ」

そう言つと辰哉君は病室を出る。

その後姿にまで文句を言う拓哉君が可笑しくて仕方がない。

私が笑っていると彼はキョトンとした顔をして何を笑っているのか

と知りたがるけれどあえて言わないでやった。

「そつえば、聞いていい？」

「え？」

「香織が車椅子に乗ってる理由：嫌なら…いいんだ」

「嫌じゃないよ。知っておいてほしい。」

私は迷わずにそう答える。

これは知っておいてもらわないと困る時だつてある。

何度かそれで友達は目の前からいなくなった。

もし言つたとして彼も同じだとしたら？

…それならそれで…仕方ないつて諦めるよ。

私は俯きながらポツリ、ポツリと話し出す。

あの日、家族で公園で遊んでいた日のこと。

空は雲ひとつない青空で澄み渡っていた。

日差しは暑く、まだ春になって間もないというのに少し走っただけ

で汗をかいてしまった。

「あかねえ〜！いくよ〜う！」

茜に向かってバドミントンの羽を飛ばす。

茜はバドミントンが上手く、いつも私にやり方を教えてくれていた。

当時まだ走り回る自由があった私はその遊びが大好きで下手だとい

うのに、外へ遊びに行くといつも茜を誘っていた。

茜に何度か「香織は中学生になったらバドミントン部だね？」と、

よく言われていたのだからちゃんと覚えている。

…地面を蹴つて走つたり、草の上を走る心地よさはもつとつすらと
して覚えていないのだけれど…。

「かおり、いったよー！」

「ふ…うわ?!」

見事な空振りでシャトルは私の少し後ろにポトリと落ちる。

茜はそんなどんくさい私を見てお腹を抱えて笑っていた。

「わ、笑うなあ!」

「ほら、早く続けよ?」

茜は涙を拭きながらまだ笑っている。

私は頬をプツと膨らませてシャトルを拾いに行く。

「…あ」

そのとき強い風が吹いてしまいシャトルが風に押されて移動していき、

私はそれを必死に追いかけた。

「…かおり!!」

「かお…!お父さん!」

「香織!!!!」

家族が呼ぶ声を無視してようやく取るこの出来たシャトル。

茜に手を振ろうと振り返った時だ。

周りの皆が叫び声を上げ、そしてすぐに私の意識は途絶えた…。

目覚めると今いるようなオレンジ色に染まった病室の中だった。

私を覗き込んでいた母が声を出して泣き、そして茜は何か叫びながら外に飛び出し、そして父の顔は酷く怒っていた。

「おか…あさん?」

搾り出すように声を出すと、母は私の手を強く握って泣き声が大きくなり、そのままベッドの下に姿が隠れて見えなくなった。

「おと…うさん?」

怒った父が怖くて今度はおずおずと。

その時初めて父の涙を見た。

祖父が亡くなったとき、義理の父といっても自分を娘同然に可愛がってくれたという母は泣き崩れた。

その時も父は母の肩を抱えて黙っているだけだった。

私と茜は祖父の死という事がイマイチわかっていなくて泣く事もなく、ただお葬式にいただけなのだけれど。

父と祖父の仲が悪かったわけではない。

むしろ良い方だと思う。

それでも父は涙を見せることはなかった。

…なのに……

「…おとうさん？」

「道路に…飛び出したら駄目って、父さん言ってるよな？」

「…はい」

「本当に…お前は……！！！」

それから数日して、両親はまだ幼い私に…

いや、幼いからこそ理解してほしいと言って私の身体が半身麻痺という状態に陥った事を教えてくれた。

最初、意味がわからなかった私はキョトンとするだけだったのだけれど父と母のゆっくりと私にわかるように言う説明で

最終的に自分が走りまわる自由を失った事を知った。

担当医である橋先生は、以前言った通りに当時からずっと回復するという希望を捨てないでいてくれている。

けれど、私自身もう諦めていてだからといって不幸とは感じていない。と、思っていることを彼に話した。

「ごめん…聞いて」

「どうして謝るの？」

「言うの、嫌じゃなかった？」

「嫌じゃないから言ったんだよ？」

「そか」

この反応を見て、もう彼は私と以前のように接してくれなくなるなと感じた。

今までだってそうだったのだから。

きっと私は入院先の病院で知り合った女の子。

ああ、そういえばいたね…の存在に成り下がるのだ。

「帰るんだ」

あれから数十分。

辰哉君が帰ってくる様子はない。

何度か何処まで行ったんだろうねえなんて会話をしただけで私たちはあの後ずっと沈黙状態だった。

そんな中、時計をチラリと見て車椅子に座りなおした私に拓哉君は何故か私とは反対にある窓を見ながら呟くように言った。

「え…？うん…。今日は検査の日じゃないし、いつまでも外出歩いてたらお母さんうるさいし…」

「そっか…。気をつけてな？」

「うん、また明日も…来ていいかな？」

こんな事聞くのはおかしいと思う。

それにわざわざ聞かれると断りにくいというのに私は聞いた。

…ずるいよね。

「え？うん。待ってるよ、俺…そのさ。結構暇だから話し相手がいると助かる」

「…話し相手」

彼女って言われたのを訂正しないということに、ほんの少し変な期待をしていた私に唾を吐いてやりたくなった。

まあ、それは少し前に崩れ去っていたのだけれど…
でも、心の何処かでまだ喜んでいたのに…。

彼にとつて私は入院生活で出来たお友達の一人なのだ。

そしてきつと、この関係は彼の退院と共に終わるに違いない。

それはもう…現実なのだ。

兄弟の間でなんとなく入院の時の話になり「あゝ、そういえばいたね？車椅子の子」なんて存在になるに違いないんだ…

「…香織？」

「あ…ご、めん。じゃあその…辰哉君にもまたねって…伝えておいてね」

「あ、うん。」

「じゃ…また」

私は慌てたように笑顔を作って手を振る。

そして出口に向き、車椅子を前進させドアに手をかけた。

「香織」

また、彼が私を呼び止める。

泣きそうな私は彼にその姿を見せるのが嫌で仕方がなかった。

一刻も早くここから立ち去りたい…

だから私は振り向かず返事をする。

「…その…さ。本当に、何も、されたりしてないよな…アイツに」
「え？」

「え…っと…アイツ…さ。タツなんだけど…。タツは本当…手が早
いんだよ…誰でもいいっていうか…だから、香織…大丈夫だったか
なっ」

不思議だった。

不思議と顔が緩んでしまう。

だって…彼の顔が想像できたから。

一緒にいる時間はまだ少しだけだっていうのに今彼がどんな顔で私
に話し掛けているのか…

それが自然と瞼の裏に映っていた。

…嬉しいんだ、私…

思わずクスリと笑ってしまう。

嬉しさと可笑しさ、それが同時に押し寄せてきて笑いを堪えるのに
肩が小さく震えてしまう。

「か、香織?! さ…されたんだな?! そんな…怖い事されたのか?
ちよ…こっち向けて…香織？」

慌てたように声を発する拓哉君。

いつもあまり笑ったりしない、怒った顔をしない。

そんな彼が取り乱す。

もうおかしくて、おかしくて…声に出して笑ってしまう。

「…え? ちよ、え？」

「なあんにもないっば」

そう言ってニッコリ笑いかけ振り替える。

やはり…拓哉君は慌てたようにベッドから起き上がった。

「もう。またベッドから落ちそうになるよ?」

「…うつせえ」

拗ねたように俯く。

私はもう一度笑うとゆっくりと拓哉君の元へと移動した。

「あー。なによそれえ」

クスクス笑いながら拓哉君の顔を覗き込んだ。

拓哉君は目をあわさず、プイッと顔をそむけた。

まるでだだをこねる子供のようなその仕草がすごく可愛い。

私は笑いながら頭を撫でてあげる。

「よしよし、いいこいいこ」

「あーもう帰れよお!!」

「帰ってもいい?泣かなあい?拗ねて明日話してくれなくなるんじゃないのお?」

そう言ってもう一度顔を覗き込んだとき、さっきとは違って拓哉君と目が合った。

また目をそらして顔を背けると考えていた私は予想外の事に驚き、今度はこつちが目を逸らしてしまった。

「おい…目、逸らすなよ」

「…どつちが…」

「香織?」

顔が熱くなっていくのがわかる。

耳がジリジリと痛み、恥ずかしさで涙まで込み上げてきた。

ただ目が合ったただけだというのに…。

「さ、帰ろう…かな!」

そう言っって顔を上げて笑ってみせる。

手を振ろうとしたとき、その手を拓哉君が掴んだ。

「…拓哉…く?」

大きな手が、私の手首を掴む。

力強く…ギョっと。

でも痛くない程度に。

戸惑っている私を見て拓哉君は一度俯き手に力を加えて私を逃がさないようにする。

ああ…どうして彼にはこういった私の行動を読まれるのだろうか。

今にも逃げ出したい気持ちの私はただ、彼が手を離すのを待つだけだった。

でも、離さないで…

そう思っている自分に少し驚く。

今すぐこの病室から飛び出したいというのにこの手の力が弱まるのがすごく怖かった…。

そんな事を考えているうちに拓哉君がスッと顔を上げる。

話し掛けようとする私を止めるように…

唇にふわっとした感触。

「え？」

そう声を出したくても、出す事ができない。

そして目の前には拓哉君の顔だった。

窓から差し込む夕日が綺麗で、真っ白な部屋がオレンジ色に染まる。

そんな中で私は、まるで時が止まったように思えた。

唇が離れた時、時計の秒針が動き出す音が聞こえ院内放送が耳に入ってきて…

そして自分の心臓がトクントクンと高鳴っているのがわかった。私はおずおずと拓哉君を見ると、彼もまた同じのようで…

目が合ったとき照れくさそうに

「…ごめん」

と、謝られた。

「そ、の…いきなり…え、っと」

「拓哉…君」

「え？あ、はい」

「今のキスに…は、意味とか…あった？」

わざと遠まわしに聞く自分がいやらしい。

拓哉君はしばらく黙った後、

「あった。その…香織？俺、こんなだけ…。すぐ足治すからさ…

俺と、付き合うつていうか…俺の彼女に、なってほしいんだけど」

嬉しさで涙が込み上げてくる。

知らない間にこんなにも彼を好きでいて、こんなにも彼を想っていた。

こんな短期間だというのに…

恋はこんなにも早く成長するもんなんだ…

でも、私と彼では駄目だ。

彼にはもつとふさわしい人がいるのだから…

私はそうやって、今までもちゃんと諦める事ができたのだから。

「拓哉君… 私たち、まだお互いの事…何も知らないよ？それに、

私の…足…のこつと…ふえ…な、んにも…できなつく…ううあ…」

「香織？俺は気にしない。いや…全くって言ったら嘘になるぞ？けどだからって死ぬわけじゃないんだろ？そりゃさあ…不治の病で来

月には死んじやうつて言われたら俺だつてそこらは悪いけど考えるぜ？けど違うんだろ？俺は、気にしない。今俺が知りたいのは香織の気持ちだ。香織がどう思ってるかだよ。…香織が決めればいい。嫌ってんなら…無理ってんなら俺は諦める。そんなときは今まで通り頼むぜ？」

そう言つて手の力を緩める。

これはきつと彼からのささやかなメッセージ。

わかりにくい…わかりたくもない…メッセージ。

“自分で決めれば良いよ

香織が思うようにすればいい。

”
香織の気持ちを教えてほしいから”

「う…ふえ…好きです…すごくすごく好きなんです…何も知らないのに…！恋なんてとっくに…とっくに諦めてたはず…っう…なのに…ッ！少ししか話してなくても…ひう…拓哉く…っでいっぱい…です…うう…ッ！いいの？私で…いいっの？ひう…わたっしの…あ…う…っく…うあ…私…で…っく…」

ポロポロと零れ落ちる涙。

それと一緒に私の口から溢れ出す言葉。

どちらも止める事が出来なくて…

拭つても拭つても零れる涙も、口を閉じても閉じても溢れ出す言葉も…

恥ずかしくて恥ずかしくて…

そんな私を拓哉君はギュッと…優しく抱きしめてくれた。

一度緩めた手にもう一度力を込めて私を自分の方に引き寄せて。

「あー泣かないですよ？嬉しいよ、ありがと。これからもっと話そう？そしたら自然と知っていけると思うよ。これからもっともっと笑おう？そしたらさ、きつと毎日が楽しいよ。な？香織？」
さつきまであんなに溢れていた言葉なのに今度はピタッと止まってしまつて

私はただ首を何度も何度も縦に振るだけだつた。

泣き止むまでの間、拓哉君はずつと頭を撫でていてくれた。

「大丈夫？」

「…ん。」

鼻をズビズビいわせながら小さく頷く。

拓哉君はもう一度頭を撫でてくれた。

「もうちよい、いる？」

そう言われて時計を見ると時刻は夕方の五時を過ぎていた。

ここにいたいという気持ちの方が強いだけれどいつも門限を守っていたというのにこの車椅子を手に入れて…だとか、茜から拓哉君の事を聞いていて拓哉君の所為で…と、なるのは絶対に嫌だ。
だから私は小さく首を横に振つた。

「…そか」

「ごめん…ね？門限が六時なの」

「いいよいいよ。目とか赤いけど…大丈夫、かな？」

「…えーっと。これはなんとかして誤魔化すよ」

「そか」

「ん」

お互いさつきまでのことがなんだか恥ずかしくて一つ一つの返事が短くなつてしまつ。

それがおかしくて思わず吹き出しそうになる。

そんな微妙な空気を変えてくれたのが辰哉君だつた。

「たつだい…ま？」

「…タツ、お前遅いつて」

「お帰り…なさい」

「まてまてまーて！何この微妙な空気。つか…え？！香織ちゃん泣いてんの！？」

「あ…えと…違うの！うー…と…違うんだよ？」

「タクになんかされた？！くそ…てめーひでえな」

「もういいし。てかアイスは？香織、このアイス持って帰りなよ」

「え？でも…」

「あー、香織ちゃん明日も来る？」

「え？あ、はい」

「そしたらそんなときに買ってあげるー。これさ、ちよつと溶けちゃった」

「お前…何処まで…？…っ？！」

突然目を丸くする拓哉君を見てニヤニヤと笑う辰哉君。

私は何がなんだかでキョトンとして二人の顔を見る。

しばらく黙り込んだ後、何故か顔を赤らめて拓哉君が

「…香織、そろそろ帰らないと」

「え？あ…！本当。じゃあ、先に失礼します。また明日ね」

「ん、また明日」

私は二人に向かって軽く手を振って病室を出る。

途中、知り合いにあってたけれど急いでいるというを送ってくれようとしてくれた。

けど、なんだか今日は自分で帰って怒られるなら怒られてもいい！そんな気分になりつつあったために断る事にした。

家に着いたのは門限十分前で、息を切らして玄関に入る私を見て母が心配そうにアレコレ聞いてきたけれど私はそれを適当に受け流してひまわりの種を差し出した。

明日、みんなで植えない？と。

「ふーん」

香織の姿が見えなくなったのだろう。

辰哉は扉をゆっくりと閉めた。

相変わらず顔はニヤニヤしている。

「…なんだよ。アイス、よこせ」

「ふうふうふうん？」

「なんだよ！なんか…ウザイぞ」

「べっつにくアイス食べるんだ？」

「食べるから頼んだんだろ」

「ほいよ」

辰哉はニヤニヤしたままアイスを差し出す。

俺はそれを奪うようにして受け取った。

カップを開けると完全液体状態！というわけではないのだが…

「溶けてる」

「そりゃな」

「いただきます」

「おいおい。何してたか聞かないの？」

「遅いとは思ってたけど。仕方ないな」

「だよなあ。あんな中さあ、入」

「うっめー！ー！！アイスうめーよ！食っ？タツも食っか！？」

「あんなすっぱー告はk」

「うおおおお！溶けかけてて案外いけるのな！！！」

「タク」

「…」

無駄な抵抗だった。

俺が黙り込むと辰哉のやつは横に座ってこっちを見る。

あーニヤニヤやめろって！！！！

「付き合ってるわけじゃなかったのな」

「…」

「否定しないとかあく見栄張ったのか」

「別に…ちげーよ」

「本当にあの子、好き？」

「あ？」

「確かに可愛いけどさ。どっか行く時とか不便だと思っけど」

「いいだろ？別に。」

「ま、タクがいいなら僕は何も言えないね？」

辰哉はそう言つと外をチラッと見る。

慌てて病院を後にする香織が目に入った。

そっだ、これからもっと楽しくなるさ。

あいつ言ってた。

“恋なんて諦めてた”って。

諦めてたことを後悔するほどにしてやる。

あの時諦めるのをやめてよかったって思えるようにしてやるっ。

うん、それがいい。

退屈だった日々に光が差し込み、そしてその光がもつと輝いてから時間はあつという間に流れ、過ぎしやすくぼかぼかとした春は過ぎ、この所毎日空を見上げると泣き出しそうだった。

雨が降るとなると、検査でもないのに病院へ行くチャンスがなくなる。

私は幼い頃から人一倍雨が嫌いで雨の日は外に出る事なんて絶対にしなかったからだ。

彼の事を両親に話せていない今、なんと言つて外に出ればいいのか思いつかなかった。

(ちなみに茜にはその日顔を合わせた瞬間にバレタ。私の顔がニヤニヤしていて顔に書いてあつたらしい。)

「茜、今日さあ？」

「昼から降水確率80%だつて」

「まだ何も言つてない」

「…彼氏、退院してないんだ？」

「いや、もう少しで退院できるみたい」

「あつそ。」

茜はそういうと再び雑誌に目を戻す。

毎朝毎朝顔を合わせるたびに天気や降水確率を聞いてくる私に少しうんざりしているのもあるんだと思う。

私はポーッと窓を見ていつものように『退屈』と、言葉を零す事も泣く大きな溜息をつくだけだった。

…というか私は天気予報に…違うな。

太陽に嫌われているんだな、うん。

で、雨に好かれている？

それは勘弁してほしい…

「香織？あなたの携帯鳴ってるんじゃない？」

リビングでテレビを見ていると買い物から帰った母が濡れた服をタオルで拭きながら言う。

「ほんと？」

私は顔が緩むのも気にせず部屋へと向かう。

ベッドの上に置かれた携帯から音楽が流れる。

私はすぐに携帯を開いた。

「もしもし！」

「あ、香織？俺。」

「うん！」

「なんか、元気だね？」

「そんなわけではないよ…また今日も雨降るよ？このままだと来週の検査まで会えないんだけど！」

「ごめんな？寂しい思いしてない？もうすぐ退院できるからさ、待っててよ。」

「寂しいけど…こればかりは仕方ないし。別にタクの所為じゃないんだから謝らないで？」

「でも、香織の所為でもないんだからな？またブルーならんてな？」

「…つぶ。はあ〜い」

「声、聞けてよかった。じゃあ俺そろそろリハビリ行ってくるな」

「あ、うん。電話ありがと！」

「ん、じゃあ。」

この頃私は彼の事を“拓哉君”から“タク”と呼ぶようになっていた。

弟である辰哉君がそう呼んでいるのもあったし呼びやすいのもあるし。

（ちなみに辰哉君のことも“タツ君”と呼ぼうとしたのだけれど私が何度もタツ君とタクを間違えて呼ぶときがあったためにタクに却下されてしまった。どうしてこう、ニックネームとなると苦手なんだろうか）

それと、もう一つわかった事はタクと辰哉君は十八歳。

私より一つ下で高校三年生だということだ。

初めて見たときに私は自分とそう歳は離れていないだろうなと思っていたのだからなんとも思わなかったのだけど

（自分が行かなかった高校というところで羨ましさと興味はあったけど）

タクも辰哉君も私はもっと年下。

まあせいぜい高校一年生か中学三年生あたりかな？と、思っていたらしい。

「私そんなに子供っぽい!？」

と、聞くと二人は顔を見合わせて笑っていた。

（その日、茜に同じ質問をするとファッション雑誌を渡された…。）

「なんだったの?」

「え?あー…友達だよ」

「へえ。病院の子?看護婦さんかしら?」

「病院の子だよ。」

「そ。」

「ん」

テレビの前へと戻ると茜が小声でタクからの電話かと尋ねてくる。私は小さく頷き、小学生のようににはやしたてる茜を無視してやった。

やはり雨は降りつづけ、私はもっともつと雨の日が嫌いになった。検査の日の朝も外は雨で

私の嫌いな臭いがツンと鼻に入ってくる。

「車出してもらおう?」

母が私を気遣ってくれるが首を横に振る。

「…でも」

「お母さん、ありがと。でも行って来るよ。帰り…ちょっと見たいところもあるしね」

「そう?なら気をつけてよ?」

最初の頃は母は私の一人での外出を反対したし認めてもらってからも玄関でうんざりするほどいろいろな忠告を受けていた。

でもここ最近は何もなく、笑顔で見送ってくれる事が多い。

こんな雨の日に出ると言えば何か言われるかもしれないと思ったがそんなこともなかったようだ。

「あ、香織待つて待つてえ〜」

戸を閉めようとしたところに茜が慌てて止めに来る。

首をかしている私の肩に茜がいつも部屋でしている肩掛けをかけたくれた。

「風邪引くと駄目だからね。まあ、多少濡らしても大丈夫だから。」

あと、傘さしてだと危ないんだから気をつけてよ?私送っていく?」

「んーん。ありがと」

「あー…そのさ？彼氏の事なら私病院の前でバイバイするし。帰る頃になつたら電話か何かくれれば迎えにもいけるよ？」

「大丈夫だよ？ほんと。」

「あー…どうしたんだろ。なんかすつごく心配になってきた。いつものお母さんみたいだ…」

茜はそう言つて頬を赤らめる。

私はその好意が嬉しくてニツコリと笑顔になる。

「ありがと、茜。でも大丈夫。きつと私は今、初めてお着替えができるようになった子供と一緒になの。」

「一人でできるもん！みたいなの？」

「そ。多分そんな感じ」

「なるほど。…わかった。気をつけてね？」

「ん、いてくる」

私は茜に手を振ると、傘を広げる。

前の検査の時は折り畳み傘で行つただけれど酷く後悔することになったため、邪魔でも大きな傘だ。

私は傘を固定して車椅子を前に進める。

顔に少し雨がかかつてお化粧がとれたかもしれない。

（今までお化粧なんてしたことなかったのだけれど茜に習つて少しくらいはまともな化粧が出来るようになった）

それくらい病院のトイレで見ればいいことだ。

ま、いつか。なんて呟きながらも先を急いだ。

「センサー」

「わ、香織ちゃん…傘さしてないの？」

「いや…急いだらかかっちゃった」

「今日も一人なんだ？ご両親に送ってもらえばよかつたのに」

「いーの。」

「その…茜ちゃんは？」

「え？茜も言ってくれたけど大丈夫って言ったよ」

「そっか。」

橋先生は小さな声で返事すると私を向かいに座らせた。

「体調はどんな感じかな」

「いつもと一緒」

「うーん。じゃ、そこ寝てみよう」

いつもと同じ質問をして、いつもと同じ行動。

先生のマッサージは患者さんの間で評判がいいことは知っている。

だから何度か手や肩を！と、頼んだ事がある。

そのたびに先生は苦笑いをして「おばあさんだね」と言って私をからかっていた。

（まあその後当然、「じゃあセンスはひいじいちゃん？」と言われて落ち込んでいるのは橋先生なのだけだ）

「そういえば、香織ちゃん最近この病院に出入りしてるんだって？」

「…そりゃ、検査ですから」

「あー違う違う！検査以外の日だよー」

「そんなことないけど」

「あら？この間私も見ましたよ？」

「患者さんにお友達でもできたかな」

「…そんな感じ」

そう答えているのに先生二人共はニヤニヤと笑っていた。

このニヤニヤは…そう、辰哉君に似てるな。

清美さんのことを話しても信じてもらえず、最後にとびっきりの黒い笑顔で

「502号室のさーあ？」

と、ニヤニヤと橋先生が言った瞬間、私はむせてしまった。

「ん、大丈夫かな？」

「な…あ、はい…」

「まーさ。香織ちゃんも女の子ってことで 今日も行ってくるのかな」

「…はい」

「悪い事じゃないんだからいいじゃないか、隠さなくてもいいのにな？」

そう先生は言うけれど…

好きな人とお付き合いをするだとか、片思い以外の恋愛なんて初めてのために周りにどう話せばいいのかわからなかった。

実際、茜に聞かれたときもどう答えればいいのか散々迷った…。

ただ、なんとなく「ご機嫌だね？例の彼と何かあった？」と聞かれただけなのに飲んでいたお茶はこぼすし、咳き込むし…。

それで“何か” あったのはすぐにバレタのだけれど…

バレテいてもどう言えばいいのかなんてわからない。
恋を諦めていた身としては、少女漫画なんて読むとまた違った意味で悲しくなるし読まない。

あの瞬間、少女漫画を読んだことがないということに後悔した。

(そんな人、きつとどこを探しても私くらいかもしれないな。)

だから、小さな声で「付き合うことにしたの」と、言ったとき…

あの時は溶けてなくなってしまうたかった…。

「でも、彼はいい子だと思うよ、うん」

「…え？」

「僕が担当しているわけじゃないんだけどね？けど、すごくいい子だ。あのくらいの子って、まあ香織ちゃんくらいの子もだけ？いや…なんていうか、んー…」

橘先生はいろんなことを話してくれるのだけど言葉を選ぶのが“少し”苦手らしい。

前にふと、そんなことを言っていた気がする。
少しね、少し…と。

だからこうやっていいことを言おうとしても
なかなかちゃんと説明ができないので困る。

「えーつと。そう、高校生。あの子高校生らしいんだけど…あ、知
ってる？」

「あ、はい。高校三年生ですよね」

「あー、そうそう！でね。今の高校生って他人に挨拶とかしないで
しょー？まあ、多少関わりのある人とかならしてもさーあ？けど、
あの子僕にもちゃんと挨拶してくれるんだ。僕だけじゃないな。院
内の医者と看護師にすれ違ったら必ず頭を下げているね。何度もそ
んな姿を僕も見ているよ。今時珍しいよねえ。ちゃんと挨拶のでき
る子ってさー」

タクが橘先生やツノちゃんに挨拶しているところを想像する。

なんとなくなんだけどタクは人見知りなイメージがあったからそん
なところ想像するのは難しかった。

私と話しているときでも、未だにポツリポツリといった感じに話す
し辰哉君と話しているときはそうでもないのだけど…。

「ねえ、それってなんていうか…挨拶はするんだけど無愛想みたい
な感じ？」

「あー、どうだろう。確かにちよーつと無愛想っていうかぶっきら
ぼう…？な感じはあるねー、彼。」

「やっぱりー」

「何？なんでニヤけてるの？」

「べっつにい〜」

“別に…”は、タクの口癖のようなものだった。

タクにとってバツの悪い話や、タクが照れたりするときに“別に”
と、すぐにいう。

だから私は最近そんなタクの微妙な口癖を真似するようになってい

た。

「今日の香織ちゃんのご機嫌だね？なんかさ、雨もあがりそんな感じ」

「え、どしてよ」

「んー…べつにいい？」

「…ぷ」

「え、あの子の真似なんでしょ！？女優さんの沢じ」……………」

「違うから〜！ほら、センサー！そろそろ仕事仕事！！ツノちゃん来ちゃっ」

「う、あー！そうだね、うん。よし、今日はもうマッサージ終わっ
たしもう行っておいで？」

「え、もういいの？」

いつもよりも十分ほど、終わりが早い。

私はうれしいのだけどそれを顔に出さないようわざとらしく“え？
どして？そんなのいいの？”というようにして首を傾げた。

「いいよー。夕方に帰るんでしょう？気をつけて帰るんだよ？」

「はいー！…」

「ほんと、今日はご機嫌だねー？」

「…あ」

嬉しさを出さないように…と、自分に言い聞かせたはずなのに自分
でもビックリするほど返事した声は大きかった。

「…」

「…」

橘先生のニヤニヤに耐えられずゆっくりと口を開く。

「「べつにいい…！」「」

同時に同じことを言っと思わず吹き出してしまっ。

まさか…ここで橘先生が言うとは…！

先生も同じみたいでお腹を抱えて笑っていた。

「もう！そんなに笑わなくてもいいじゃないのー！」

「ぶ…くくツ…！さ、は、早く…ツ…い、行つておいで？」

「…ばーか！」

いつもはお礼を言つて診察室から出るのだけれど今日は舌をべーつと出してやった。

先生はそれを見てまた笑い、隣に立つ看護婦さんに叱られていた。

…馬鹿だなあ。

私はいつもの自販機でタクの好きなメロンソーダーと

私が好きなアイスマルクティーを買つて病室へと向かう。

晴れた日と検査の日の昼から夕方にかけて私はタクの病室にいる。

その日は辰哉君も気を遣つてくれているのか滅多なことがないと顔を出さなかった。

変な気遣いはなんだか悪い気がして、何度か行くのをやめようかと思つただけでそうすると辰哉君も知らないままだし結局誰も行かなくなるだけではないか、ということに気づいてあわてて用意して飛び出した日もあつた。

辰哉君に気を遣わないで！と、わざわざ言つのもアレだしなあ…

「失礼します〜！タク、今日は検査がはy…？」

軽くノックをして、扉を勢い良く開けた。

部屋に入るといつものようにタクが迎え入れてくれると思つた。

ちよつとした軽はずみな行動つて怖い。

いつもなら「入るね？」つて、声をかけて入るのにここのことろず
ーっと会えなかった寂しさ、そして早めに会えた嬉しさの所為だ…。
タクのベッドの横に座った子の視線が痛い…

「あ、香織。久しぶり、早いんだな？」

「えー…うん。」

「あ、さつき話してた彼女。」

タクに紹介しろと言わんばかりの視線を向けていた女性はもう一度
私の顔を見た。

「あ…え、と…東…東香織です…」

なんだか睨まれているのが怖くなり、自然と声が小さくなってしま
った。…情けない。

そしてペコリと頭を下げると彼女も椅子から立ち上がった。

「…如月奈々子です。結城とは同じクラスで。」

「あ、そう…なんですかあ…」

「香織？そんなとこにいないでこっち来たら？」

「あ…う、ん。そうだよね、うん。そうする」

なんだかわけのわからない返事をして彼女とは反対側に移動する。

私の指定席には彼女が椅子を置いて座ってしまっている…。

「…じゃ、あたし帰るね」

「え？かえんの？」

「うん、彼女来たんだし…。」

「わ、私は別に…」

「じゃ、また。東さんも…また。」

「あ…はい」

彼女…如月さんは軽く手を振りさつさと病室を出てしまった。
タクはキョトンとして私の顔を見る。

「別にいいのにな」

「うん」

内心、（ちよつと私、あの人苦手かもお…）と思っていたけど口に

は出せず、頷くことしかできなかった。

タクはしばらく何かブツブツ言っていたけれどポンポンと、さつきまで如月さんがいた場所を叩く。

それはタクの“こっち、おいで？”の合図だった。

いつもなら扉を開けてすぐにしてくれる。

だから私は喜んでそっちに行く。

けど、なんだか今日はウキウキした気分にはならなかった。

窓際の私の席：なのにな。

「香織？」

「今日は、ここがいい」

「…？そっか。」

「ん」

短く返事をするとも何も言えなくなってしまふ。

タクはそれをどう受け取ったのか、

(多分私の小さな嫉妬に気づいてないんだろなあ)

私の頭を撫でながらニツコリと笑った。

「元気だった？」

「…ううん」

「ほー、どうして？」

「…会いたかった。声だけじゃ…足りないよ」

そう言つて俯くときゅつと私の体を引き寄せる。

車椅子に座っているから少し変な体勢になつたけれど何も言わずに

ただ、甘えることにした。

「俺もだから、さ？そんな顔すんなってー」

「ん…。」

そのまま何も言わずにギュッとタクの手を握る。

タクも何も言わずにそれに応えてくれる。

私はその瞬間が好きで、好きで…

唇を重ねるわけでもなく、愛の言葉を囁きあうわけでもなく…

ただそんな瞬間、タクが愛しくて、愛しくて…

「もうすぐ、退院なんだ」

「…ほんと？」

「うん。リハビリもいい感じらしいし再来週には退院できるだろう
って。ギプスも取れたし、やっと復活って感じだな。」

「…がっこ。」

「え？」

「じゃあタクはお昼はガツコなんだね」

「あー…そうなるね」

「…寂しいな」

「…仕方ないよ、これが俺の仕事だからさー」

「…うん。変な事言っでごめん」

そっだ。

タクが退院して学校に通うのは当たり前のこと。

このまま就職するのか進学するのか聞いたこと無いけれど、タクと
私とじゃ生きる道が全く違う。

そんな事最初からわかっているはずなのに…
寂しくて、寂しくて…

(あー…一つ何かあると嫌な事ばっかだな)

なんて思いながら、それ以上何も聞かなかつた。

「でも香織？悪いことばかりじゃないぞ？くもりの日でも、俺が
そっちに行ける。今よりも会える場所は増えるんだからな」

「…そう、だよ。えへへ、私何拗ねてるんだろーえへへ…」

会える時間が減る。

タクの言うとおり、学校が終わってから会えるのだ。

それにタクの事だから私が会いたいといえば来てくれるだろう。
でもなんだろ…変な気持ち。

「え、えっと…さっきの…きさらぎ…さん？とは仲良いの？」

ばぱつと話題を変えたつもりだったのだけどまた自分にとって都合の悪い質問をしてしまう。

別に女友達がいるのはいい。それにいて当然でしょう…

なのに、いいって思ってるのにさっきのあの子に嫉妬してる。

「ん、どして？」

すぐに答えてくれないところがまた引つかかる。

私、こんな女だっけなあ…全然駄目じゃん…

「いや、別に…！仲いいのかな？って思ったただだよ」

そう言っただけニツコリと笑ってみせる。

出来るだけ自然にしたつもりなのに、タクは私の頭を自分の胸に引き寄せた。

「…わ。タク？」

「如月は委員長なの。クラス委員ってやつ。で、俺は副委員長さん。」

「え、タク…が？」

思わず吹き出しそうになり、笑を堪える。

そんな姿を見て、少し恥ずかしそうにそして、顔を背けながら

（あ、いつものタクだ…）

「寝てたの！寝てる間に勝手に決まってたんだよ…」

と、言った。

確かに自分で立候補するようなタイプではないしね、君は。

なんて言っただけだからかうとしばらく口を利いてくれなくなるのでだんまり。

「で、どうして？」

「え？」

「如月の事、気になったのになって」

「…別にいゝ？」

香織さあーと、少し嬉しそうに声のトーンを上げて話すタク。

いつも見せない姿に嬉しさと、そして面白さ…

「何笑ってんだよ」

「で、なんなの？」

「…最近よく『別にいい』って言うよなあ」

「何い？嫌？てかこれね、タクの口癖なの」

タクは頭を掻きながら知っていると呟き、

「でも俺より言ってるねえ？」

と、笑っていた。うん、たしかに…そんな感じする。

「口癖ってうつるもんなんだ？」

「ん、多分？なんだろ…私いつもタクの『べつつにい〜』が気に入ってたから？」

「え、そうなの？」

「…べつつにい？」

「…クソ」

お互いバツの悪い顔をして、そしてニヤッと笑いあった。

さっきまでの変な嫉妬心や不安は不思議となくなっていて…

見つめ合って私がクスッと笑うと、何故か真剣な顔をしたタクはそつと私の頬に手を当てた。

「香織…」

いつものように呟くようにして私の名前を呼ぶ。

なんとなくなんだけれど、タクに名前を呼ばれるだけで嬉しい。

きつと、タクがしてくれることならばなんだって今は嬉しい気がする。

そんな事を思いながらゆっくりと唇を重ねた…

「退院したらすぐに来れるの？」

「や…どうだろうなあ。医者次第ってとこだと思うよ。」

「…ふーん。どうする？退院の日、手伝いに来る？」

「如月は学校あるだろうが。そっち優先で。」

「いいよ、別に。一日くらい休んだからってどうってことない。」

「俺が嫌なんだって。」

困ったような…けどそんなに嫌がっていない笑顔を向けるタクに苛立ちを感じ、そんな顔をさせて私の指定席に座る彼女に嫉妬して…何も言えず、どうする事も出来ずかれこれ十分が経過していた。

私の手の中にあるメロンソーダとミルクティーの氷が溶け始めていて今飲んでもあまり美味しくなさそうに感じられる。

そもそも、この雰囲気のままの飲食は全てマスク感じそうなのだけ
れど…

いつもの時間はもうとっくに過ぎていくのにタクが私を気にする様子もない。

彼女もまた、「今日は来ないの？」なんてことを聞かずにタクとの会話を続けようとしている。

そんな二人の中に入っていくのが怖くて、オバケのように病室の前に立ち尽くしていた。(立ってないけれど…)

「あー…あ。」

後ろから突然声があったと思うと、私の手からメロンソーダが消えた。慌てて振り返ると口元で人差し指を立てながらメロンソーダを口に運ぼうとする辰哉君がいた。

「辰哉…君」

「しーっ…うわ…マズー…炭酸抜けてるじゃんかー。早く飲まないといけないんだよ？氷も溶けだしてるし。そっちのミルクティーも貸してみて？」

そう言われ自分の左手に持つミルクティーを見る。

そのまま辰哉君に渡そうと思ったがそれを口に運び一気のみした。

「…おー」

「うわ…マズー…」

「そりゃそだろ。」

「ですよね」

そう言つて苦笑いをする。

二人とも病室の中の二人には聞こえないように小声で話している辺りが怪しい。

「で、こんなとこで何してるの？中はいんないの？」

「あー…入りますよ…？入ります…」

辰哉君は頭の上に「？」を浮かばせながらそつと中を覗く。

私がノックして少し扉を開けたのにも気づかなかった二人を見て少し困った顔をする。

「…奈々子ちゃんかあ」

「辰哉君も如月さんと仲良いんだねー？」

「あー、うん…まあ。仲良しっていうか、彼女は結構有名人なんだ。綺麗な顔立ちしてるでしょ。で、男の子にはホテル、ホテル。

けど告白してきた男子全て断っているんだってさ。で、僕も一度遊びに行かないか誘ったときにふられたの」

そう言つて苦笑いをし、もう一度病室の中を覗いて何事かブツブツ言っている。

そんな辰哉君越しに私も中の二人を見る。

確かに彼女…如月さんは綺麗な人だ。

それにあの性格。

クールといふかなんというか…

私は近寄りにくいなあって思うのだけれど、男子からは逆に好印象なのかもしれない。

彼女がもう少し、普通並みのルックスなんかだと…（贅沢を言えば性格も悪ければ！）

私もこんな嫉妬心を持つ事なんてなかったに違いない。

「ね。」

つんつんと肩をつつかれ、辰哉君の顔を見る。

彼はニツコリと笑って

「たまには僕とデートしない？」

「はあ？」

「や、ほら。初めて会った日みたいにさ、どっかで。…駄目？」

「ん…」

辰哉君と仲良くしているといつもタクはいい顔をしなかった。

口には出さないけれど、表情が変わるのを私は見逃さない。

自分と同じ顔でほとんど似ている声。

背丈も変わらず、違うのは性格くらいだ。

誰にでも笑顔で話すことの出来る辰哉君と、人見知りをしてしまうタク。

そんな性格の違いがタクを不安にさせているようだった。

だから私は辰哉君に何度かこうやって誘われているが全て断っている。

正直、友達付き合いのようにして遊びに行きたいな…とも思うのだけれどタクが嫌な事はしない。そう自分の中で決めていた。

「奈々子ちゃんの話…聞けるよ？」

「え？」

「奈々子ちゃんの事、聞きたいんじゃないの？」

「…べつつにい」

「ふうん？僕、去年は一緒のクラスだったから知ってること多いよ？彼女可愛いし？デートしたくてちよつと見てたし」

「…そうなんだ」

「知りたいんでしょ？てか、気になってるんでしょ？」

「べつつにい！！てゆか…そうやって物って言い方酷いけど…そゆやり方ズルくない？」

「べつつにい…ってタクかよ。ズルイかなあ？僕はただ、気になってるようだから？ちよつとお茶飲みながら話してみない？って感じなんだけど」

辰哉君は方眉を上げ、ニヤッと笑う。

別に私はいいのだけど…

そう思いながら自然と病室の中に目をやる。

いつもの時間からもうとつくに三十分以上も経っているというのにタクは時間を気にする様子もなければ、私に連絡を取ろうともしない。

そんな姿に腹が立ったのかもしれない。

タクと彼女は友達。

頭ではわかっているのに、心が受け付けない。

そして私は気がついたら、

「ん、じゃあ聞かせてほしいです」

と、返事をしていた。

辰哉君はニッコリ笑って先に歩き出した。

私はもう一度タクの方に目をやり、寂しさと苛々が込み上げてくるのが嫌ですぐに辰哉君へと視線を戻した。

「さ、姫。参りましょうか」

そう言いながら私の車椅子を押す辰哉君。

こうなったらヤケクソだった…。

「で、そろそろいいかなあ？」

「ふえ？」

「あ、飲み込んでからでいい……」

以前、私がタクと勘違いした日に一緒に入ったカフェは込んでいて車椅子の私と一緒にいる事は困難だった。

謝ろうと辰哉君を見ると、彼は笑顔のまま

「この先にマクドナルドあるんだけど。そこでいいかなあ？」
と、聞いてくれた。

私が頷くと歩いて十五分ほどの場所にあるマクドナルドに入る事になった。

どういうわけか胃がブラックホールな気がして店員さんにメガバ―ガー二つとポテトのし。

そしてコーラのしにチキンナゲットを頼んだ。

「うっわあ…あ、支払い一緒にいいです。僕は…えーっと。コーラのMで…」

「え？私自分で払います。」

「いやいいから…誘ったの僕だし」

「あー！なら減らします」

「早く向こう座ってなさい」

辰哉君はそう言つと、私からお金を受け取らずに会計を済ませ私に席取りを命じた。

私は渋々サイフを仕舞いこみ、空いている席に移動して椅子を退かせて車椅子で移動した。

まもなくして辰哉君がトレイ二つを持ってこっちへ来てニヤつと笑いながら

「どうぞ、怪獣さん」

と、さつきは姫と言ったのにすごい格の下がった名前で呼ばれてしまった。

私はそれに何も言わずに一番にメガバーガーに手をつけ、ポテト、コーラ、ナゲット、コーラ、ポテト、二つ目のバーガー、コーラ…と、トレイの上の物を全て胃の中に入れ、サイフを持って再びレジへ並んだ姿を辰哉君は呆然と見ていただけだった。

戻ってきた私のトレイにはメガバーガー二つ、チーズバーガー一つそしてポテトしに今度はオレンジジュースのしが乗せられているの言葉もなくしていた。

やっと最後のメガバーガーを口の中に入れたときずっと黙っていた辰哉君が口を開いたってわけ。

「ふう」

「おっけい？」

「おなかいっぱい」

「そりゃ、そうだろね」

「もう入んない」

「そうだと思うよ」

「で、お待たせ」

「はい」

辰哉君は呆れたような、笑っているような溜息をつきコーラを飲んで一息を着く。

それからゆつくりと話し出した。

「見ていたらわかると思うんだけど。彼女…奈々子ちゃんね、タクが好きなんだ」

「…うん」

それは言われなくてもわかる。
というより言わないで欲しい。

認めたくなかったから考えないでいたというのに。
彼女の好意はクラスの委員長だからではない。
そんな事：誰が見たってわかるもの。

「で。実は告白もしている」

「え、えええ?!」

それはわからなかった!

「声、大きいから。香織ちゃんさっきの怪獣で大分みんなの視線集めてるんだから…!」

「あ、うん」

私は遅いとわかってるのに慌てて口を抑える。

辰哉君は苦笑いして話を続けた。

「で、あっさりとタクはお断りしましたとき。」

「そ、そうなの?」

「うん。彼女は“これから好きになってくれればいい”って言ったらしいんだけどタクはそゆの…無理なヤツみたいでねえ。「無理です」って言ったみたいだよ?僕ならあんなに可愛い子なら即、ok出すけどなあ」

…それも言われなくてもわかってるから、辰哉君。

それはおいといて。

ということは、彼女は断られてもまだタクのことが好きってわけだ。
そりゃ、簡単には諦められないもんなあ。

で、タクと話す時は素っ気無い感じがしても所々笑ったり、柔らかい顔をするんだな。

…あ、タクと似てる。

「それは…いつの話？」

「告白？」

「うん。」

「いつかは聞いてないな。僕もさ、最近頻繁に彼女を病室で見かけるからタクに聞いたんだよ。いくら委員長でもあんなにする？みたいな。実はお前の事好きだったりして！って、からかったつもりがさ。あいつちよつと顔赤らめてやんの」

あ、やっぱ少しは嬉しいんだ。

「だから問い詰めたら告白されたって。でも断ったみたいだし、そこらは香織ちゃんに気にしなくて大丈夫でしょ」

「あ…うん。辰哉君は如月さんのこと、好きだったの？」

「ん？…好きっていうか、興味だよ。さつきも言ったけど、彼女可愛いからね。いや…可愛いというより美人だね。だから付き合ってたみたいになって思っただけ。」

「最初、名前で呼んでるから親しいんだと思ったけどさういえば辰哉君は私の事も会ったときから名前で呼んでたね」

「嫌かな？」

「んーん。」

「そ。いやさ。みんなが奈々子ちゃんのこと「いいんちよ」って呼ぶから僕もさう呼んでただけど、彼女は嫌いみたい。たしかにね、最後の「う」何処やったよ！みたいだね」

…それとはまた違うんじゃないかなあ。

「で、まあ。奈々子ちゃんって呼んだら呼んだで、「なれなれしい…」って言われたよ。呼び捨てにしても同じだったかもー」

「なのに、そのまま？」

「まー、本人の前では出来る限りは「如月さん」なんだけどねー。けどたまにそのまま呼ぶと怒っちゃうの」

へーんなの。

そう思いながら彼女ならさういうかもなあ…と、彼女の顔を思い浮

かべた。

そしてその時思い浮かぶのがタクだった。

タクは彼女の事を「如月」と、呼んでいた。

それほど親しいから？

どうなんだろう…ああ…ヤダなあ。

次々いろいろなことを考えてしまう。

「まだ不満そうだね」

私がそんな事を考えていると、辰哉君が覗き込むようにして聞いてくる。

そんな難しい顔していただろうか。

「え…そうかな」

「うん。いろいろ話すよりこのこと言う方がいいかなって思ったんだけど？」

「あ…でも、なんだろう。タクって…じゃあ、誰にでも優しいのかな？如月さんに対して、結構優しいとこ見せてるし…」

「そりゃーねえ…やっぱりそうなっちゃうんじゃないの？」

「この子好きだから、もしものときの保険みたいな？」

「あー、違う違う。気をさ？遣っちゃうんじゃないかな。やっぱり自分はその子の幸せのチャンスを握ってたわけじゃん。けどそれを無くしちゃっただろ？だから…なんというか、そうなっちゃうんだ。」

「へー。」

「香織ちゃんに向ける優しさとは全然違うよ？それは僕が保証しましょう」

私が曖昧に笑い返すと、信じてないと少し怒り出ししばらくの間はタクの不器用エピソードを聞かされるハメになった。

私の知らない頃のタクも今のタクもやっぱり同じで、思わず顔が緩

んでしまう出来事ばかりだった。

「タクから告白したんだって？」

「わ…何、二人とも何でも話しちゃうタイプの兄弟？」

「や。タクは結構言いたくないみたい。でもあいつ、押しに弱いところあるからさあ。問い詰めてやるとポロつと吐くんだ」

そう言い、ニヤリと笑う。

これから先…少し気をつけたほうがいいのかも。

あ、でも。浮気を調べる時とかタクは調べやすい人なのか。てか、しなさそう…

「で、そうだったらどうなの？」

「ん、そうなくせにい。まあさ。今までタクから告白した事ってないんだよな。香織ちゃん、よっぽどなんだねえ？」

優しいような、照れるのを待っている悪戯のような笑みを浮かべ辰哉君がこつちを見る。

私はどう答えたら良いのかわからず、そのまま俯いた。

顔がじわつと熱くなるのを感じ、それから顔を上げるまでに数十分の時間を必要とした。

「今日はごちそうさまでした。」

「いえいえ。家まで送るよ？」

「あ、それは大丈夫」

「僕って本当…信用ないねえ？」

「そういう意味じゃないってばあ」

「ま。いつか。タクには伝えておく？」

「えーつと。」

このことを内緒にするのはどうかと思った。

別に何かやましいことがあったわけじゃないのだから辰哉君と食事

をしたくらい言ってもいい。

けど、如月さんへのヤキモチを感じられなくなかった。

「私は今日…病院にはいなかったことにしてください」

「え？別に何もないんだし、タク怒らないでしょ」

「違うの…違うの…」

何も言えず、下を向くと辰哉君は察してくれたのか頭にポンと手をおき、

「わかった」

と、言ってくれた。

私はお礼をもう一度言い、帰路へとついた。

途中で携帯を覗いてみてもタクからの連絡はなくズキッと痛む心を押さえつけるしか出来なかった。

お風呂から上がって、今日は茜と話す気も起きなかったために早いけれど寝ると家族に告げて自室へと戻った。

ベッドの上の携帯が光っているのに気づき、ピンク色のランプからしてメールを受信したのだとわかった。

- タク -

受信したアドレスはタクのものということに心臓が高鳴る。

嬉しい半分、今日の事を少し嫌味でも言っただろうかと考えつつメールを開いた。

- 今日はお疲れさまあ〜(^^*) -

タイトルを見てタクからじゃないことがわかり、ションボリする。だいたいどうして辰哉君がタクの携帯からメールしてくんのー！

・香織ちゃん、無事に家に着いたかな？

言いつけ通り、僕はイイ子なのでタクには何も言っていないよ。

口止め料、もらわないとなあ〜？*^o^*

あ、そうそう。

今タクのやつトイレ行ってんの。

香織ちゃんのアドレスを僕のに送るよりこっちのが早いからさ？
あいつにバレたらまた拗ねるしねえ？（笑）

で。本題〜

香織ちゃんさ、今日結局タクから連絡なくて落ち込んでない？
それさ〜、タクも一緒だってば。

タクは香織ちゃんがいつもの時間に来ないのも心配してたし、
それつきり何も連絡無しに夜になったこともすごく寂しそうなん
だけど。

てか気持ち悪いくらい落ち込んでるー！。

聞き出したら

「どうした？とか、んなこと恥ずかしくて聞けるか！」だってさ。
何が恥ずかしいんだか。

こりゃあれだな。

香織ちゃんが病院向かう途中何かあっても気づけないな^^；
なんか、依存してるって思われたら嫌なんだったさ。

馬鹿だよねえ？（笑）

危うく僕、言いそうになったよ。

とりあえずさ、メールしてやって？

今日の事は適当に言い訳すればいいよ。

それじゃ、明日股着てやってねお休み -

タクがトイレ行っている間によくまあこんな長文…
最後の方はきつと、タクが出てくるか何かで慌てて打ったに違いない。

だから漢字変換が間違っているんだと思う。

せつかくいい感じのメールなのに、台無しだな。

でも、少し嬉しくなりそして辰哉君と同じく「馬鹿だなあ」なんて思いながら

返信ボタンを押して、さっきのメールがバレないように「Re:」を消しておく。

- 今日はごめんね。

茜が風邪引いちゃったの。

で、ずっとつきつきりでした。

連絡が遅くなってごめんなさい。

明日はそっち、行くね？

それじゃ、おやすみなさい -

嘘をついてごめんなさい。

そう呟きながら送信ボタンを押し、ベッドに潜り込んだ。

閉まりきっていないカーテンの隙間から見える月が、とても綺麗に見えた夜だった。

これは余談なんだけど。

いつも一つのメールを返すのに最低五分掛かるタク。

その日はわずか一分弱で返ってきた。

- お姉さん大丈夫？

無理しないで。

でも来てくれたら嬉しい。

じゃ、おやすみ -

普通の内容のメールだというのに、私は小さな声で

「新記録」

と、呟いてメールを保護した…

・私たちのデート・

気づけばもう雨の季節は去っていった。

梅雨が去ると同時に、カラっとした太陽が顔を出す。

毎日、毎日「こんにちは！」と、私に手を振ってくれるのだけれど……
ほらあ……そんな大きな声だと恥ずかしいからさ雲の間に隠れて挨拶
しなあい？なんて思っても全然聞いてくれなくて……

父の車での通院はクーラーが効いていて気持ちよかった。

去年が懐かしい……。

きっと父は私が申し出ればokをくれると思う。

けど、父が一緒だとタクに会えなくなっちゃうために私は意地でも
一人で通院した。

この頃、タクはもうとっくに退院していた。

（退院の日、少しビクビクしていたけれど如月さんの姿は見えな
かった。）

だから私の検査が始まる前にメールをしておいて、検査が終わった
頃にはもうすでに院内にタクがいる。

これが私たちのスタイルになっていた。

「香織。」

「お待ちせつ」

以前とは逆で、今ではタクが私のミルクティーを買って待っていて
くれた。

「ふう。おいし」

「お前、本当にそれ好きだよな」

「タクだって人の事言えないよ？」

「……う。そうだけどさ」

病室で過ごしていた私たちの関係を知っているのは橘先生と清美さ

ん、そして一部の看護士さんたちだけだった。

でもタクの退院から私の検査の日に二人一緒の姿を目撃する事が多くなり私たちの事は自然と院内へ広まっていた。

親心になって私の事を見てくれていた病院の人たちは喜んでくれたり、少し複雑そうな顔をしたり…。

一人一人の反応がそれなりに面白かった。

(角ちゃんも相変わらず何も言わずだったけど。)

「今日はどうする?」

「んーっと、タクは何処に行きたい所ある?」

と、言っても私たちが遊びにいける場所は限られている。

公園、映画館、動物園、水族館、そして大きなゲームセンターやシヨッピングセンター。

この中でも動物園や水族館に行くには電車で三十分ほどかかるし、映画館含めそういうところはお金が掛かる。

ゲームセンターだって同じだし結局は公園で鳩に餌をやるで終わるのだ。

「公園、行くか」

「ん。わかった。んじゃ、清美さんどこで何か買ってこ?」

「んだな」

私たちは行き先を決めると売店でポップコーンとペットボトルのジュースを買い、病院から数十分歩いたところにある公園へと出かけた。

休日の昼は子供連れの親子や、小学生たちが多く賑わっている。

寂しいのが嫌いな私にとってこの場所は大好きな場所の一つでもあった。

(タクの退院後、初めてのデートで何処に行くか提案が出ないまま三十分過ぎたときに私が提案してお気に入りの場所を紹介する事になったのだ。)

「鳩くこつちこつちい」

「おい、鳩くってなんか可愛くねーぞ」

「だって鳩じゃない？」

「そうだけど…」

タクは小さく笑い袋の中からポップコーンを掴んで地面に撒いた。私の手の上に乗ったポップコーンを食べるか迷っていた鳩を含め、辺りにいた鳩全てがそっちへ移動してしまう。

「わ…！タクずるいんだけど！」

「そんな手の上に餌乗っけてるからだろー？警戒されてんのに無理無理い〜」

「わ、わかんないじゃん」

「それ、毎回聞くんですけど」

「う…」

「で、一度も手の上の餌を食べたの見てないんですけど？」

「い、意地悪…」

「あほー」

タクはニカッと笑い、私の方へポップコーンを投げる。

慌てて避けたけれど車椅子の座席にいくつか落ちてしまう。

「ちよ、つと…汚れちゃ…うわ、ああ!？」

ポップコーンを追って先ほど仲間に先を越された鳩たちがこつちへ飛んでくる。

座席に零れたものも全て掃除してくれるようだ。

私の驚いた姿を見てタクは何が嬉しいのかケラケラと笑っていた。

「タアクウウウ！」

「う、っわ。怒るなつて！！あ、コラ！投げるなー！！！」

私がポップコーンを投げると今度はタクの方へと鳩が移動する。そしたらまた、タクが仕返しと行ってこっちへ投げる。

そのやり取りが二、三回行われた後顔を見合わせ

「食べ物粗末にはいけません！」

と、言い笑った。うん、その通り。

「ねえ、タク？」

「ん？」

帰り道、まだ明るい空を見上げながら私がポツリと話し掛けた。

二人ともさっきまであんなにはしゃいでいたのに。

それはいつもの事で、仕方ない事だった。

住んでいる家がお互い反対方向ということでは会う機械は少なかった。私は未だ、両親にタクの話をすることができていなくてそれをタクも察してくれているようだ。

だからこっちへ向かいにくるわけにもいかないし、引きこもり状態だった私がヒョイヒョイ外に出るわけにも行かないってこと。

だからまた、しばらく会えないね。声と文字、だけだね…

そういうのが怖くて、寂しくて…で、こんな雰囲気になっちゃう。

「タクは…夏だなあって感じるのとはどんなとき？」

「…暑くなったら」

「それじゃ今年タクの中じゃ先月には夏だったんだね」

「暑かったもんな」

「うん。」

「香織は？」

「私？んー…私は日が長くなったら…かなあ。あと、空。」
「空？」

「季節によって雲だつて全然違うの。だから空を見上げた時の雲の形。私ね、空見るの大好きなの。なんか、自分がちっぽけな気もするんだけど大きくなつた気もしちゃう」

「そうか？」

「うん。私だけかも。けど、それがいいんだ。いつかさー、漫画とかドラマみたいに寝そべて空を見上げたいよ」

「ん。すればよかったのに？公園のベンチとか」

「えー。やだよー。河原がいいな！草原とか！」

「わああ」

「何、その目」

「別に…」

「うわ、その“別に”は冷たい時の別にだ！」

「はあ！？全部一緒だろーよ」

「違うもん」

「うるさいなあ」

気が付くといつもの楽しい雰囲気に戻る。

それももう慣れっこで…最初は「なんだか変だよねー」なんて笑つてただけだね。

「今度、河原行ってみる？」

「やだよー。ここら辺なんてゴミいっぱいだよ？」

「だよなあ」

「いいよ、別に。こうやって見ることも出来るし。それに簡単に言えば家のベッドの上からでも見えるんだからねえ。」

「……あ」

「ん？どうかした？」

「…別に？」

「…？」

「ほら、帰ろう」

タクはそう言うとノロノロ運転する私の後ろに回り、車椅子を押してくれる。

一緒にいたいがためにわざとだっというのに…もう。気づいてよね！。

「じゃ、また。」

「…ん」

「そんな顔すんなって」

「ん」

短く返事を返す。

これは拗ねてますよー！のアピールなんだけど…。

もっと一緒にいたい。もっともっともーっと一緒にいてよ！

そういうアピールに気づかないのがタクなわけで…

きっとこれが辰哉君なら気づくだろうし、私がそんなアピールをする前に工夫してくれる。

けど、そんなことに気が付かないタク。

でも私はきつとそんなタクが好きなんだと思う。

「日曜さ」

「え？」

「次の日曜、出れる？」

「え、っと…わかんない…」

「出れるよな？水族館、行きたいって言ってたし行くこうぜ」

「で？嬉しいけど…どうしていきなり？」

「約束な？じゃ。来週な」

タクは私の質問には一切答えずに手を振って去っていった。

いつも私が駄々をこねるようにして一緒にいる事を引っ張っている

とちゃんとそれに付き合ってくれたのになあ…
そう思いながらも来週の水族館を今から楽しみに、胸を躍らせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1712e/>

君の支え

2010年10月8日23時02分発行